

大正十年六月二日發行

大正十年八月五日印刷納本

修監 馬生島寿 村藤崎島 Z32-B88

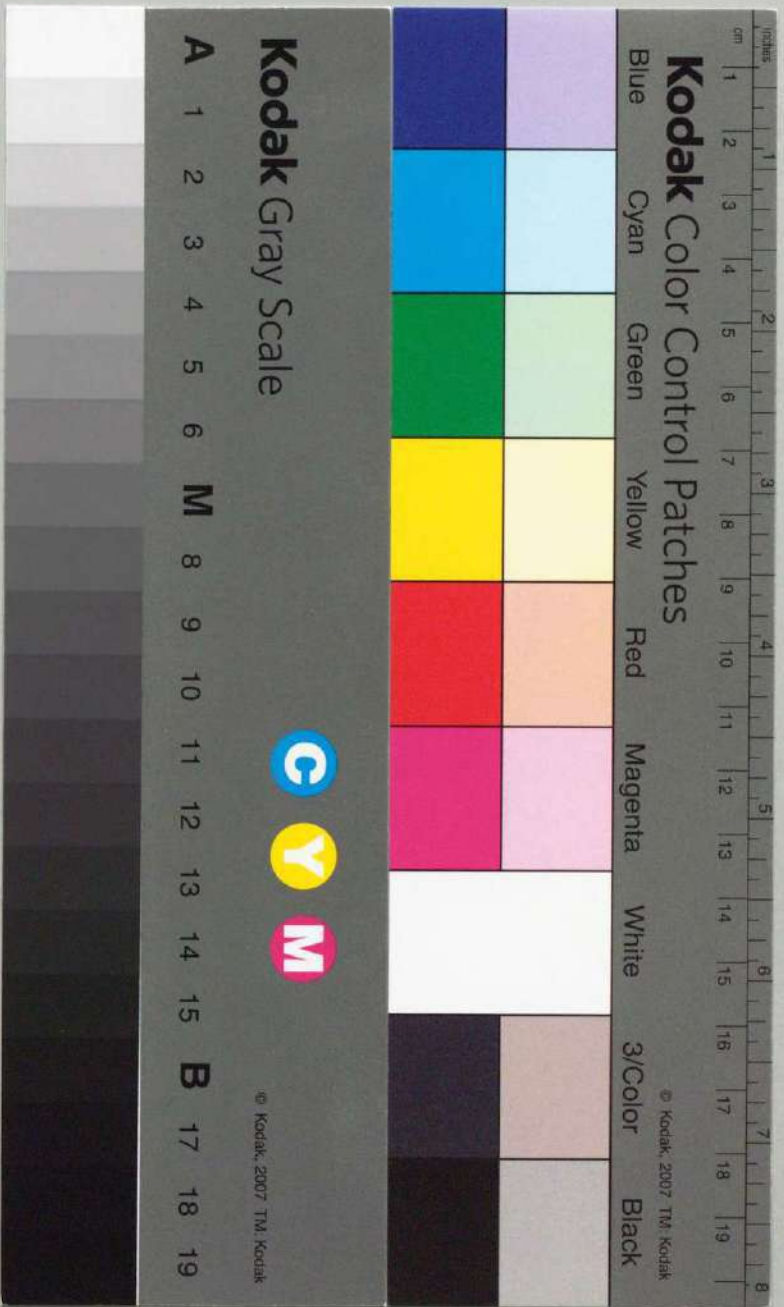
金の船

號月九



秋期特別增大號

国立国会
8. 3. 26
図書館



Kodak Gray Scale

C
Y
M

© Kodak, 2007 TM Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

抒情詩
名作叢書

編四	編三	編二	編一
竹久夢二先生著 詩集青い小徑	野口雨情先生著 民衆別後	水谷勝先生著 小詩寶石の夢	西條八十先生著 抒情小曲靜かなる眉
發賣	五版	六版	第十版
袖珍箱入金九十錢	袖珍箱入金銀六十錢	袖珍箱入金銀六十錢	袖珍箱入金銀六十錢
送料五錢	送料五錢	送料五錢	送料五錢

(來出版五忽)

童謡集

十五夜お月さん

皆様が久しい間お待ち兼ねの童謡集十五夜お月さんが、本居先生苦心の作曲と、岡本先生獨特の装幀と繪とが付いて出來ました。野口先生が今を去る二十一年前初めて童謡に筆をとられて以來の傑作は全部本書に載つてをります。郷土の人と土とに對する愛と親みと輕妙限りなき辭句とは、童謡を作る人々にとりてはこの上もない手引草となり、又、小學校に於ては唱歌の教材ともなります。皆様は誇張せる廣告文に眩惑されず、内容實質共に優れし、純日本童謡の權威たる本書をお選び下さい

四全送
六版一冊
箱入實價
最上金八
製類壹圓
美類壹圓
本錢廿錢

東京市神田區
市本町一丁目
神保町六十區
文尙堂
振替口座
替四三九
座四三九
東四番

野口雨情先生著
本居長世先生曲
岡本歸一先生畫



ニッポ
ーホン
鷺印
レコード

大正十年八月新譜御案内

常盤津	流行唄	端唄	俚謡	書生節	琴獨奏	落語	馬鹿囃	萬歳	浪花節	長唄	曲種
積懸雪關扉	新編江節	二上り吹きよせ	安來節	水(變奏)	八幡由來	家外天神丸	不來歸	安來節	山鹿護送	秋色	曲目
(先月の次二枚)	松尾太夫	共立檢	岩本花子	市川鏡保	片岡憲行	桂川	砂川拾丸	加藤お徳	藤田實	芳村孝次郎	演奏者

□ 日本に始めて現はれた民謡全集 □

生田 春月氏 編 ■ 新刊 菊牛六郎 二線組 (全八頁以上)
四百餘頁 装幀極美 (の内容を有す)

日本民謡集

定價一圓五十錢
送料八錢

民謡は日本民衆藝術の精華である、幽婉にして哀切を極むる日本民族天真爛漫の調べは本書の上に燦然たるものがあらう。

□ 最も新時代に適應した子供の本 □

林檎の落つる音

序著 直戸一士 博士 農學
藏 藤白邊 博士 農學

六十餘篇のお話は何れも取りなげに面白い。子供をどうして良い方へ導いたらよいかと苦心される父兄達に是非此書をお薦めする。

□ 文部省認定にして實に一二三版 □

定價 壹圓 捌錢
送料 八錢

越山堂

東京 神樂坂 中
田町

振替 東京 一段九
電話 二九三
四五九二

(二の付前)金

育兒に

童丸

小兒新藥童丸を備へなくては、理想的の育兒法の實行は出来ません。

童丸は 小兒科醫學博士の推奨し監督製劑せられたもの
童丸は 小兒の五疳、驚風、ちねねつ、ひきかせ、夜泣をすぐ治す
童丸は 高い所から墜落して氣を失つたり、ひきつけた時の應急藥
童丸は 生來虛弱な小兒の體質を健康にする活力素

日本一の小兒藥小兒病の大博士



定價 二圓五十錢
五三二一
圓圓圓圓圓

中將湯 本舖

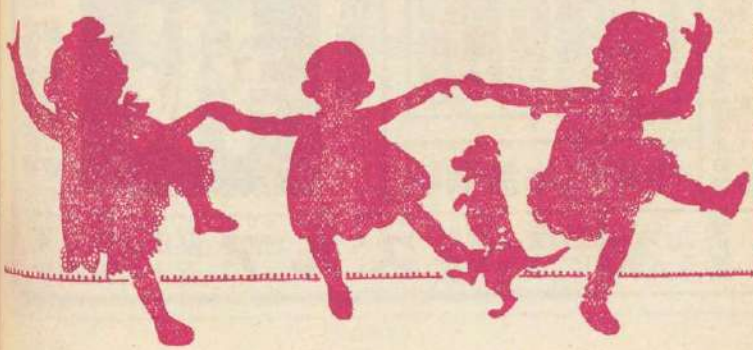
津村順天堂發賣

本店 東京市日本橋區通四丁目
支店 大阪市堺區大寶寺町
▼全國の有名賣藥店にあり▼



目次

蟲の唄(表紙・原色版)……………岡本歸一
 へんな老人(口粉・三色版)……………野口雨情
 赤い櫻ンぼ(童話・曲譜)……………野口雨情
 守り袋の神(童話)……………四・沖野岩三郎
 鏡國めぐり(長篇童話)……………二・西條八十
 蟹とり(繪はなし)……………三・岡本歸一
 罪なき娘を探ねに(童話)……………四・馬場孤蝶
 母子草推測童話……………三・高橋五村
 岩と椎の實とミンク蟬の話(童話)……………三・三島霜川
 印度イソツブ物語(童話)……………三・楠山正雄
 乞食の子が伯爵になつた(童話)……………三・齋藤佐次郎
 ひとりじめ(シンガソング)……………四・船橋重一



後の山六爺さん

源氏の四人の若君(歴史童話)……………三・窪田空穂
 田舎よ、さよなら(童話)……………三・内藤豊雄
 お母さんのお留守(対話)……………四・中島孤島
 哀れな鴉の話(推測童話)……………三・伊藤温子
 唐櫃の魔物(推測童話)……………三・寺島西男
 蚊柱と数寄な年の話(傳説)……………三・藤澤衛彦
 姓名判断(童話)……………三・山野虎市
 曙の國(日本神話)……………四・楠山正雄
 かな(童話)……………三・野口雨情
 春の野(童話)……………三・野口雨情選
 船出タ(自由童話)……………三・山本鼎選
 牛出シ(幼年詩)……………三・若山牧水選
 牛のなんざ(綴方)……………三・編輯部選

（附録） 沖野岩三郎





へんな老人(はんならうじん)

岡本歸一畫

帯おびから革袋かわふくろをぶら下げた、長い白い髯ひげのへんな男おとこが出て來ました。その老人らうじんは、勢いきほひよく王子おうじに向つて頷うなづいて、

『私わたしは此地こゝをよく知しつてゐる、お前まへが十分に禮れいをくれるといふなら、私わたしが案内あんないして、この森もりから出してあげる』と、云いひました

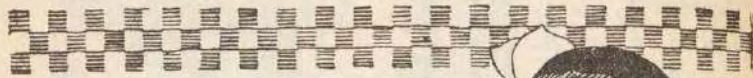
(『罪なき娘を探しに』の二十七頁を御覽下さい)



赤い櫻ンぼ

野口 雨情

赤い 赤い
櫻ンぼよ
どこで生れたの
一軒家の



お脊戸で
生れたの
ほんたうは
櫻ンぼよ
どこで生れたの
ほんたうに
一軒家の
お脊戸で 生れたの





守り袋の神

沖野岩三郎

行内といふ金持は、お金を五千兩持つて、お江戸へ行かねばならぬ事になりました。行内の住んでゐる町からお江戸までは三十里ばかり離れてゐて、其間には大きな峠が三つありました。

いよゝ行内が、お金を持つて、お家を出ようとするし、お銀りの兵衛が来て、

でございませうか。」

「これは清正公でございませう。加藤清正が長い槍を揮つて、大きな虎を退治してゐる繪が描いてあります。」

「あゝさうですか、有難うございました。加藤清正公なら、どんな泥棒でも逃げませう。」と云つてそれを首へ掛けて出て行きました。すると一町程行くと重内といふ男に出會ひました。

「行内さん、あなたは、お金を持つて江戸へお出でなさるさうですが、近頃あの二の峠へ時々追割が現はれるさうですから、盗難除のお守りを持つてゐらっしゃい。私を一つ差上げますから……」

重内は紙入の中から一枚の紙片を出して行内に上げました。

「有難うございます、これは何様のお守りでございませうか。」

「それは張飛様でございませう。」

「張飛様ツて？ どんな神様でございませうか。」

「張飛ツてのは支那の英雄で、何とかいふ橋の上で

「あなたは、五千兩のお金を持つて江戸へお出でなさるさうですが、聞けば此頃、あの一の峠へよく泥棒が出るさうですから、盗難除のお守りを持つてお出でなさいまし。」と云つて、小さい守り袋を一つくれました。

「有難うございます。これは何といふ神様のお守り

大鳴一聲したら、八十萬人の敵軍が皆な懼えて逃げてしまつたといふ程偉い人です。」

「まア、さうですか、一聲で八十萬人を追返したんですか。」

「だから、此の張飛様を持つてゐれば、どんな強い追割が出て来ても大丈夫ですよ。」

「さうですネ、八十萬人の追割が出て来ても、皆な追放つてくれますネ。」

云ひ乍ら行内は其のお守りを、清正公のお守り袋の中へ入れました。すると重内はまた紙入の中から小さいお守りを出して、

「序にこれも差上げませう、これは其の張飛様の兄様で、關羽といふそれは偉い人の像です。」

「へエ、張飛の兄様？ それはさぞ偉い人でせうか。」

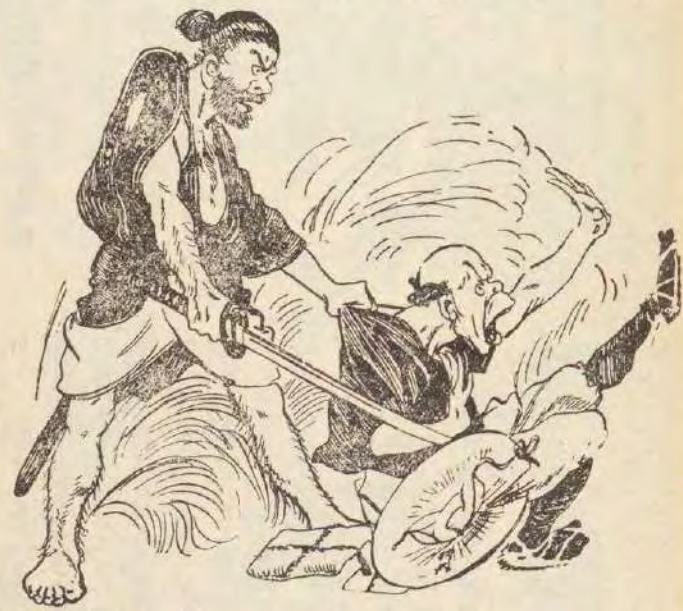
「偉いとも大變な人です。今でも支那へ行けば關羽廟といふのが村々町々に建つてゐて、神様になつてゐます。此の持つてゐる刀は青龍刀と云つて重さが八十二斤です。」



「さうですか、そんな重い刀を振廻すやうな偉いお方なら、泥棒が出てきつと助けて下さるでせう？」
 行内は何度も「お禮を言つて、重内に訣れました。そして其日の夕方第一の峠を越えましたが、追剽にも泥棒にも會ひませんでした。次の日の夕方は第二の峠を越えました。けれども兎の仔一疋も出て來なかつたので、安心して麓の宿へ泊りました。さて三日目の朝、宿を出立しようとし、主人が、
 『お客様、お江戸へお出でなさるには、今日の夕方第三の峠をお越えなされねばなりません、彼の峠には此頃、峠々泥棒が出るさうでございますから、

これをお持ちなさいまし、これは泥棒除のお守りでございます。』と言つて、行内に小さい紙片を三枚あげました。
 『有難うございます。此れは何といふ神様のお守りで御座いますか。』
 『それは見雷也といふ、忍術使ひの像でございます。これを持つてゐれば、隠れ蓑を着たやうに、あなたの身體が泥棒の眼に見えなくなるのでございます。』
 『有難うございます。それからこれは？』
 『それは石川五右衛門といふ泥棒の親方で日本一の大泥棒で、それを持つてゐますと、小さい泥棒は、皆なおッ膽消して逃げしまひます。』
 『有難うございます。それから此れは？』
 『それは支那の諸葛孔明といふ人で、其人は死んでから後でも、司馬仲達といふ大將を追退けた偉い人です。死せる孔明、生ける仲達を走らすといふ言葉があります。それを持つて居れば、あなたが途中で急病にでもなつて死んだくて、泥棒は近づきません。』

『有難うございます。それでは、これを皆な頂戴いたします。』
 行内は其の三枚を、また無理に小さい守袋の中へ捻ぢ込みました。そして其日の夕方、第三の峠へ差かかりました。だが、坂路を十町ばかり上つたと思ふと薄暗い杉林がありました。行内は少し氣味悪く思ひ乍ら、杉林の中を二三十間も歩いたと思ふと、大きな杉の切株の後ろから、雲を突くやうな大男がぬツと出て來ました。



行内は膽を潰して逃げ出さうとすると、其の大男は突如長い臂を伸して行内の襟をぐツ！と掴みました。
 「こら！金を持つてゐるだらう？其の金を皆な此所へ出せ！」
 泥棒は、さう言ひ乍らぐんぐんと行内の胸倉をしめつけました。
 「清正公……張飛様……關羽様……」
 行内は大聲で呼び立てました。が、泥棒はそんな事には頓着なしに、行内の懐へ手を入れて、大金の金容を引ッ掴



みました。それを奪られては大變だと思つて、
 「見雷也様……石川五右衛門様……諸葛孔明様……」
 と叫びました。

「何だつて、俺は見雷也でも石川五右衛門でもないよ。其の金をこちらへお渡し！」と泥棒は五千兩の大判を引ッ奪つて、雲を霞と逃げてしまひました。行内は地團太踏んで泣きましたが、何ともする事が出来ませんでした。

ところが不圖首にかけてゐた守袋のことを想ひ出して、

「何だい、馬鹿々々しい、これだけ澤山、盗難除のお守りを持つて居たのに、何ぼ呼んだつて一人も出て来てはくれなかつたぢやアないか！」と云つて、其の守袋をビリ／＼と引裂いて途の上に投げつけました。と、同時に大地震のやうな響がして、行内の目の前には大變なものが現はれました。

一疋の大きな虎が牙を剥出して出て来ました。加藤清正が槍を抜つて出て来ました。大きな眼の

玉の張飛が出て来て、雷のやうな聲で、わあ！ツ！と叫びました。髯の長い關羽が八十二斤の青龍刀を掲げて悠々と出て来ました。口に巻物を銜へた見雷也が、牛程な大きい蛙に乗つて出て来ました。鑽帷子を着た石川五右衛門が、ゴチャ／＼な髪を振り亂し乍ら出て来ました。美しい冠を着た諸葛孔明が、二人の家來を伴つて出て来ました。

それを見た行内は真紅になつて嘔鳴りました。

「運かつた、運かつた。もう俺のお金は皆な盗られてしまつたぢやないか。今頃、そんなに多勢出て来たつて、後の祭りだ！」

行内が、口惜しさうに嘔鳴りましたので、最後に出て来た諸葛孔明は、靜かに行内のところへ歩み寄つて、

「行内さん、あなたが悪いのです。あなたが泥棒に引ッ擱まつた時、私達は皆な、直ぐあなたを助けて上げようと思つたのですが、何さま、あんな小さいお守袋へ大きな男を五人も七人も入れてあるんです



もの、
さア早く
出て行かうと言つ
て、皆な飛び出しにかゝ
つたのですが、諸公の楯が我の口に突へたり、

一〇
關羽さんの青龍刀が、石川五右衛門さんの鬚に引ツかゝつたり、虎が尻尾を踏まれる、蛙が足を怪我するといふ騒ぎでした。あなたが袋を引裂いて下すつたので、漸くの事であるには出たが、此の通りです。」と云ひ乍ら、諸葛孔明はハンケチで滴り落つる汗を拭ひました。見れば清正公も張飛も關羽も兎雷也も石川五右衛門も、皆な汗をダクダクと流してゐました。
清正と睨みツこをしてゐた虎はもう堪らないといふやうに、ハア／＼と苦しい息を吐いてゐました。

(左はり)

鏡國めぐり

(長篇童話)

西條 八十



十六、丸長飯櫃左衛門

「コラ／＼、そんなところで氣儘に歌をうたふなんて事はならん！」
と、この時はじめて卵男は、あやちやんの方を向いて口をききました。
「それよりかまづお前の名と用向とを云ひなさい。」

「あたしの名はあやです。けれど……」
と、あやちやんが言はうとするのを、卵男はせつかに途中で遮つて、
「なに、あやだと！ すわぶん馬鹿げた名だな。いつたいその名にはどう云ふ意味があるんだ？」
「名前つて、意味が無ければいけないもの？」
と、あやちやんがげんさうに訊ねました。

「もちろんさ。」

と、卯男はニヤリと笑つて、

「現に拙者の名などは、拙者の姿をそっくりその儘にあらはしてをる。——この立派な姿をな。」

「ちやあ、あなたの名前は何んて云ふの？」

「あやちやんが面白さうに尋きました。」

「拙者か、拙者の名はそれ、丸長飯櫃左衛門と申すのちや。」

「あらまあ、すゐぶん變な名だこと。」

あやちやんは口に手を當て、思はず、「オホ、」と笑ひました。

飯櫃左衛門は笑はれて、すこし不機嫌になつて、「なにが變な名だ。見なさい、實によく拙者の姿に合つてゐるぢやないか。それにひきかへお前の名はどうだ。聞いたゞけでは本人がどんな恰好をしてゐるかさつぱり分らんぢやないか。」

「けれど、どうしてあなたはこんなところにひとりぼつちで坐つてゐるの？」

「ひよつと拙者がころげ落ちてもしたら、その時こそは……」

と、云ひかけて、さも／＼勿體ぶつた顔つきになりペロリと長い管を出して上唇と下唇とを舐め廻しました。その顔のおかしさと云つたら、あやちやんは、危くブツと吹きだしさうになりました。

「その時こそは……」
と、飯櫃左衛門は一向澄ましたもので、言葉をつゞけて、

「拙者と王様との間にちやんと約束があるのだ。どうだ、子供、青くなつてゐるならふるえてもいいよ。おまへ、まさか拙者が王様とお知己だとは思はなかつたらう？　ところがその王様がチャンと拙者と約束をなされたのだ。お口づからな、あの……それ……」

「王様の馬と兵隊とを残らず借してやるつてゝせう！」
と、あやちやんが差出口をしました。

あやちやんは、卯男とつまらない議論をするのを止めようとして、話を外へそらせました。

「どうしてひとりぼつちかつて？　それは傍に誰も居ないからぢやないか！」

と、飯櫃左衛門は答へて、

「おまへ、拙者がそれ位の謎かけに返事が出来ないと思つとるのか？　もつと他のことを訊いたらどうだ？」

「あたし謎かけなんかしやしないわ。ほんとのことを訊いてゐるんだわ。」と、あやちやんは心の中で、やしく思ひました。が、かまはず言葉をつゞけました。

「だつてあなた下におりた方が安心だとは思はなかつて、この塀はすゐぶん狭いんですもの。」

「いやはや、又しても馬鹿げて易しい謎をかけたものだ。」

と、飯櫃左衛門は豚のやうに唸つて、

「もちろん拙者は、さうは思はぬさ。なせと云ふに若しかして、——そんなことは萬々有る筈が無いが

「ヤ、ヤ、ヤ、これは怪しからん！」
と、飯櫃左衛門は眞赤になつてひどく怒つて、

「さらばおまへはあの時屏の外で、——いや樹のかげで、——さもなくば天井うらで立ち聴きしてゐたに違ひない。でなければそんなことがわかる道理が無い。」

「うそ、うそ、あたし立ち聴きなんかしないわ。さつき、でたらめに唄をうたつた時、フイとそんなことを考へたゞけなのよ。」

と、あやちやんが慌て、云ひわけをしました。

「さうか、なるほど。して見るとあの時そばを通つた風が話をおまへのところへ持つて行つたのかも知れん。」

と、飯櫃左衛門はまた元の穩やかな調子に戻つて、

「とにかくまあとつくりと拙者の顔を見ておきなさい。忝くも王様と直々に口をきいた人間だからな。おまへもう二度と拙者のやうな人に出逢ふことは無いぞ。だが、それでも拙者が一向高ぶらぬ證據に、



ひとつおまへに強手させてやらう。」

かう云つて、飯櫃左衛門は、耳から耳へつながらかと思ふほど顔一杯に口をひろげて、ニヤ／＼と笑ひながら身をのりだし、今にも塀から這り落ちさうな恰好になつて、あやちやんに手をさししました。

あやちやんはその手をとりながら、すこし心配さうに、飯櫃左衛門の顔を眺めました。さうして心の中、かう考へました。

「このひとがもすこし餘計笑つたら、口が両方へどこまでもひろがつて行つて、この先が頭のうしろで出あふことになるわ。さうしたら、まあ一體どんな事になるでしょう。キット顔が二つにわかれてしまふかも知れないわ。」

十七、帯か頭巻か

あやちやんの考へてゐることは頓着なく、飯櫃左衛門はまた話をつゞけました。

「いかにもおまへの云ふ通り、王様がこのらすのお

馬と兵隊とを借して下さるのだ。――拙者がころげ落ちた場合にはな。そして一分間たゝぬ間に、またこゝへ乗せて呉れることになつてゐるのだ。……だが待てよ。かうと、……だいぶ話があとさきになつたようだな。どうだ、一ばんおしまひから一つ手前の話に戻らうぢやないか。」

「でもあたし、どんな話をしてゐたかよくおぼえてゐませんわ。」

あやちやんは、それが卵男との話のはじめだったか、おしまひだったか、頭のなかでこんぐらかつてすこしも分らなかつたので、きまり悪さうにかう返事をしました。

「ウン、では新規にはじめることにしよう。ところで、拙者から訊くが、おまへは一體幾つだな？」

「あたし九歳よ。」

と、あやちやんは直ぐ返事しました。

「フン、九歳か？」

と、飯櫃左衛門はなにか思案するやうに繰返して、

「あまり面白くない年だね。もしお前が拙者のところへ指揮をうけに来たら、拙者は「八歳位で止めときな。」と云ふのだったのに。——だがもう今からちや間に合はん。」

「あたし年をとるのに、他人の指揮なんかうけないことよ。」と、あやちやんが怒り氣味で云ひました。

「なるほど。威張つてるね。」
と、飯櫃左衛門が云ひました。

こんなことを云はれたので、あやちやんはなほさらブン／＼して、

「だつて誰の指揮でも人の大きくなるのを止めるわけには行かないぢやないの？」

「そりやあ多分ひとりぢや出来まいよ。」

と、飯櫃左衛門は濟まし込んで、

「だがふたり掛りなら出来るよ。手傳ふ人さへあれば、八歳で止めとくことが出来るかも知れないよ。」

「まあ、あなをやるよんきれいな帯をしめて



「わかるね！」
と、あやちやんはだしぬけに他のことを云ひだしました。變ちきりんな齡の話はもういゝかげんに切り上げようと思つたからでした。
けれど、一寸考へ直して見てから、あやちやんは直ぐにかうあわてゝ言ひなほしました。
「あら！ さう／＼帯ぢやなかつたわ。綺麗な襟巻よ。あたしウツカリ云ひそくなつたのよ。ごめんなさい。」



あやちやんは、飯櫃左衛門がひどく氣嫌をわくした様子を見てとりました。さうして心の中で、「あたしこんな事を云ひ出さなけりやよかつた。」と、後悔しました。さうして、「せめてあの人のどれが頭でどれが腰だかぐらゐはハツキリおぼえとけばよかつた。」と思ひました。

飯櫃左衛門は二分間何とも物を云ひませんでしたが、たしかにひどく怒つてゐるやうでした。やが

て再び口をひらいた時には、ながく呻くやうな聲で

「どうも——實に——何とも憤慨に堪へん。頸巻と帯の見さかひがつかぬなんて。」

「ほんたうにごめんなさい。あたしまだ何にも知らないもんですから。」

と、あやちやんは、さも／＼氣の毒さうにあやまりました。これで飯櫃左衛門氏の疝癩もだいぶ治つたやうでした。

「これは襟巻だよ。おまへが云ふ通りなかく綺麗な品物だ。實はこれはスベートの王様と女王とがらの贈物なんだよ。」

「まあ、さうですか。」

と、あやちやんは云つて、飯櫃左衛門氏の機嫌がもとに返つたのをうれしく思ひました。

「あの人はこれを俺の「誕生しない日」のお祝ひに呉れたんだ。」

と、飯櫃左衛門は、両手で膝をかへながら云ひました。

「失禮ですけれど……」
 「あやちやんはどうも睨に落ちない顔付で、
 『おの一すうかやひますか』誕生しない日』のお祝
 ひつて何なのですか。』
 それは誕生日でない日に貰ふお祝の事さ、言ふま
 でもなく。」



「紙へ書いて見せて貰ひたいものだ。」
 と、云ひました。
 あやちやんは、飯櫃左衛門がツボンのかくしから
 勿體ぶつて手帖を出したのを見て、思はず笑ひかけ
 ましたが、それでも云はれた通り計算して見せてや
 りました。

5	1	4
3	6	3
3	6	3

飯櫃左衛門は手帖をとりあげて、仔細に眺めてあ
 ましたが、
 「合つてゐるやうだねー」
 と、云ひかけました。
 「あなた、でもそれでは逆さまよ。」
 と、あやちやんが注意しました。
 「なるほど、さうだつたー」
 と、飯櫃左衛門は勢よく手帖をあべこべにして、
 「やつぱり拙者が云つた通り、かうして見ても合つ
 てゐるやうだ。もつとも今のところでは叮嚀に見て

飯櫃左衛門は澄まし込んで答へました。
 あやちやんは少し考へて見てから、

「でもあたしは誕生日に頂くお祝物がいちばん好き
 ですわ。」
 と、云ひました。

「どうもこの子は一向わけがわからんと見えるな、
 誕生日に貰ふお祝なんかは、誕生しない日に貰ふお
 祝ものに較べると、まるで取るに足らんものだ。」
 と、飯櫃左衛門は云つて、

「いつたい一年は幾日ある？」
 「三百六十五日。」

と、あやちやんが答へました。
 「では誕生日は幾日ある？」
 「一日。」

「では三百六十五から一を引いたら、いくら残る？」
 「それはもちろん三百六十四です。」

飯櫃左衛門はどうもこの計算が呑込めないやうな
 顔をして、
 「ある暇が無いが——とにかく、これで見ると、一年
 のうすで三百六十四日、誕生しない日のお祝物が貰
 へるわけだね。」

「それはさうよ。」と、あやちやんが云ひました。
 「ところで、誕生日のお祝もの貰へる日はと云ふ
 と年にたつた一日だ。どうだ、拙者の云ふ『誕生し
 ない日』に貰ふお祝もの方が、誕生日のお祝物よ
 りもすつと割のいいことがわかつたらう。」

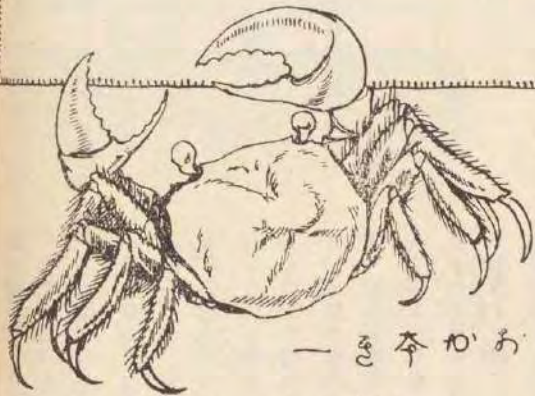
と、飯櫃左衛門は、さも得意さうにかう云つて、あ
 やちやんの顔をのぞき込みました。
 「この人、なかくうまいことを知つてゐる。」
 と、あやちやんは何だかわけがわからずながら、フ
 ト心の中で想ひました。

「あなた、そんなに算術がお上手なら、詩のお講義
 もやつぱり出来るでせう？」
 と、改めて飯櫃左衛門にたづねました。(いよくこ
 れから飯櫃左衛門氏の珍妙な詩のお講義がはじまり
 ます。)(つづく)



九月十二日、弟と二人で、築地の川岸のかし船やから舟をかりて竿でおしたり、石がけなつたつたりして、やつと、あそこへゆきました。とてもとりきれないほどありますが、僕達がそばまでゆくと、みんな石がけの間へはいこむで了びます。そこで僕がへさきで、弟はともて「かに」の穴をつついて追ひだしにかよりましたが、どうも舟のよこつばらがふくれているので石がけにつかへて、私か、弟か、どちか、石がけへ舟をつけると、どちか、石がけからはなれます。弟が舟をよせると、僕がはなれ折角出かよつたかにをながして了びます。

「だめぢやないか、今出かよつてあなたぢやないか」とやつと又こつちへくつむけると今度は向ふがおこる。ひとつ處にかたまるどぐあひが悪い、二人とも石がけにしがみついて舟をよせようと、とうけんかなははじめました。



ふはゑ
かよ
とり

— さ 弁 か あ —

（讀者諸君、いよものを見つめました。それは春雄さんの小さい時の日記帳です。春雄さんが、どんなにいたづら小僧だつたか、おしらせませう。春雄さんはそんなことしたら、絶交だと云つてますが、あんまり面白いから。）

九月十日、今日僕は、あのなん年となく毎日釣竿をもつてゐるために右の親指が左のとくらべると片輪かと思ふ程大きくなつた島田のなごさんに

「きつと、おとなしくしてゐる。」と云ふ約束、築地の海軍大学校の池へ釣りしにつれていつて貰ひました。

大學校の石崖には「かに」がうんとおました。

僕はこんどの日曜に舟はこげないが石がけなつたつて行けばいられるから舟をかりて「かに」をとりに行かうと決めました。



三

その内どうしたつて私の方が力がありますから、かつてきました。弟もやつ氣になつて石がけにしがみついて一生懸命引つばつておりましたが、舟と石がけとだん／＼はなれて来て、からだが前へのめり出して来ました。それでも、がうつくばりの弟は、はなさないでまつかになつて引つばつておます。

私もまだ降参しないかとぐん／＼力をこめて、舟を石がけへよせましたので、弟のからだはしまひには手は石がけに足は舟にと横をかけた様なかつかうで、おなかだけ水につかつて苦しうな聲を出しました。今迄夢中で力／＼引つばつてゐた私は少しも知らなかつたがそのかつかうを見ると思はずふき出しました

「兄さんおちる、たすけて、ごめん、くるしい」と泣き出した。弟は、おまげない：：手がはなれたら：：死ぬかも知れないと思ふとおどろいた。弟はもう手と足だけが石がけと舟に引つかゝてゐるばかり。



四

僕がとんで行つゝ足をつかまへると一緒にツヤブン、と手がはなれておちた。それでももうその時は僕が足をつかまへて了つたので一生懸命引つばり上げようとしたのですが、弟があはれるので、中あがりません。さうでしよ、僕はめん／＼らつてわかりませんが足をつかまへて、さかさまにおるさげて引つばつてゐたので、苦しがつてもがいたので。それでもどうやらかうやら引き上げましたが弟はさん／＼水をのんで青い顔してゐるし舟は三人とも手をはなしてゐたので川の真中へ出て了ふ、二人はおい／＼泣き出した。漸く海上中學の生徒に助けけてもらつて、びしよれの弟をおぶつて「かに」ところのさわぎでなく、かへつて来ました。又々々お父さんと母さんにひどく叱られた。僕も自分やら悪い事をしたと思ふ、正男さんごめんよ。



罪なき娘を探ね

馬場孤蝶

昔「黄金國」の王が森の中で路にふみ迷つてしまひました。いろ／＼と森から出る路を探してみましたが、とても駄目でした。で、大抵この路ならばと思はれる路をさまよひ進んでみますと、いふと彼方から誰かやつて来ました。それは、人間だか、怪物だか一寸と分らないやうなへんな姿の老人でした。

「こんなところで、何をしておいでなさる、友達？」と、そのへんな老人が尋ねました。「だん／＼日は暮れて来る、直きに狐などが巢を出て、餌食を探しに来ますぞ。」

「路に迷ひました。で、これから家へ歸らうとして居るのです。」と、王は答へました。

すると、そのへんな老人は「あなたが家へ歸ると一番始めにあなたを迎ひに出て来るものを、それが何であつても、私に下さることを約束なさい。私は森から出る路をあなたに教へて上げませう。」と、云

王は直ぐに返辭をしませんでしたが、やがて、かう云ひました。「一番始めに私を迎へに出て来るものは、私の一番よい獵犬でせう。それをあなたに上げるのは嫌です。私は獨で路を見つけます。」

すると、へんな老人は何處へか行つてしまひました。王はそれからまた彼方此方と路を探して、まる三日といふもの、さまよひ歩いたのでしたが、全く駄目でした。それで、王は殆ど絶望の有様になつてゐますといふと、不意に前のへんな老人が何處からともなくまた出て来て、王の行くてに立ちふさがりました。

「一番始めにあなたを迎ひに出て来るものを私に下さることを約束なさらぬか。」と、また云ふのです。けれども、王はまた執拗でした。彼はさういふ約束をしませんでした。

それからまた幾日か、王は森の中を彼方へ行つたり、此方へ行つたりして、路を探したのですが、自分の城へ歸る路は、矢張り目付かりませんでした。

で、たう／＼勇氣がつき果て、とある木の下に坐はつて、いよ／＼自分の死ぬ時が来たのだといふ氣がしたのです。すると、へんな老人が出て来て、かう云ひました。

「何故あなたはそれ程馬鹿なのですか？」あなたの生命の代りになるといふのなら、犬一匹があなたにとつては、何ですか？ 私の云つた通りのものを呉ることを約束なさい、私が案内してこの森から出して上げますから。」

王はもうし方がないので「成程、私の生命は何千匹の犬にも代られない。私の國の幸福は私があるければ何うにもならないのだが。」と、答へました。この言葉が王の口から出るか出ないかと思ふ間に、王はもう森の縁へ出てゐて、自分の城が遠方ですかすかに見えました。王は大急ぎでその方へと行きましたが、城の門へ行き着いた途端に、中から乳母が赤兒の王子を抱いて出て来て、王子は王の方へと手をさし出しました。王はハツとして、後へ退りました。

直ぐ中へ引つ込むやうに乳母に云ひつけました。その後へ、王の大きい猪犬が跳び出して来て、王にじやれついたのですが、王はその犬を突き飛ばして、傍へ寄せつけませんでした。

王は城へ歸つてから、王子をそのへんな老人にやらなければならなくなつたことを、甚く腹立しく思つたのでしたが、その怒が収まつてしまふといふと何うすれば、自分の大事な王子をば、そんな怪物だか何だか分らぬ老人にやつてしまはずに済ませようかと、いろ／＼と考へてみるのでしたが、やがてよい考が浮

んだので、それを實行することにしました。

王は、美しい自分の王子を百姓の娘と取り代へて王子の娘は貧乏な人民の子として、賤しい茶の中で



育てられ、百姓の娘の方は、王の子として、黄金の搖籃の中で、絹布の蒲團の下で眠かされたのでした。それから一年たつといふと、へんな老人がやつて

来て、約束通りのものをくれと、王に云ひました。王は小さい娘を渡しましたが老人はそれが王の本當の娘だと思つて、つれて行つてしまひました。王は自分の計略通りにうまく行つたのをひどく喜びまして、祝ひの宴會を催し、また、王子の假親になつてゐる百姓夫婦には澤山の品物をやりま

して、王子がなにも自由なく育つて行くやうにしました。けれども、老人が何時何時此方の計略に気がつかぬものでもないと思つたので、用心のために、王子を城へ歸らせることはしませんでした。百姓の

がは、王から澤山の金や食物を買うのですから、それで満足してゐました。

二

そのうちに、王子は大きくなるに従つて背の高い立派な若者になつて行くのでした。養ひ親の手許で仕合せな生活であつたのですが、養父の方が、或る時ひそかに、實際はその國の王の子だといふことを、王子に話したので、それ以來は、王子は何んな面白い事に對しても、それを十分に楽しむことがなくなつて、始終陰氣な風で暮してゐました。王子の心に暗い影を投げたのは、王子の身代りになつた罪なき娘のことであつたのです。

王子は、相當の齡になつたら、世界ちう何處までも娘を探して行つて、その老人の手から取り返さずには置かぬと決心しました。處女の生命を犠牲にして自分が王になるといふのは、卑怯なことなのだと思つたのです。

で、王子は、或る日、作男のやうな服装をして、



「あら、本當に困つてしまつたな。たう／＼路に迷つてしまつた。何うしたらいいだらう？ 誰も路を教へてくれるものはないのかなあ。」すると、帯から革袋をぶら下げた、長い白い髭のへんな男が出て來ました。その老人は、勢ひよく王子に向つて頷いて、

「私は此地をよく知つて居る、お前が十分に禮をくれるといふなら、私が案内して、この森から出して

あげる。」と、云ひました。

王子はかう答へました。「私のやうなこんな乞食のやうな者が何のお禮が出来るものですか。私は私の生命より外には何もあなたに差し上げるものはありません。私は主人持で、主人に食はせて貰ひ、着せて貰つてゐるのですから、私の着てゐるこの上着でさへも、主人のもので、私のものではありません。」

「へんな老人は、豌豆の入つてゐる袋を見て、云ひました。『だが、お前は何かしらん持つてゐるだらうお前は重さうな袋を背負つてゐるではないか。』

王子の答はかうでした。「中には豌豆が一杯入つてゐるだけです。私の年取つた伯母が昨夜亡くなつたので、後へ何も遺して行きませんでした。この邊の田舎では、通夜をしてくれる人たちには、豌豆を禮にやるのが慣はしなです。



「その豌豆を買う金さへなかつたんです。私は主人から豌豆を借りました。私は近路をする積りで森へ入つたんですが、この通りすつかり路に迷つて、まつたんです。」

「では、お前には両親ともないんだね？ 私のところへ奉公しては何うだね？ 私は氣の利く男を雇ひたいと思つて居るのだが、お前ならば使つてみていい。」と、その老人が云ひました。

「私の都合のいいやうにしてくださいのなら、勿論あなたの所で使つて頂いても宜しうございます。私は百姓の家へ生れて來たのですから、他人の家の飯を食ふことは辛くはありません。あなたの家へ奉公するのも、私に取ればおんなじです。給金は何れだけくださるんですか。」

と、王子は云ひました。

「毎日新しい食物をあけるよ。一週に二度焼肉を

あげる。乳酪と野菜もあげる。それに夏の着物。それから、お前だけの用に使ふ地面を幾らかあげるよ。」と、いふのが老人の答へでした。

「それで結構です。私が村へ歸らなくつても誰かが伯母の葬禮はしてくれるでせう。私はこれから直ぐお宅へ参りませう。」と王子は云ひました。



この約定が、その老人には甚く嬉しかつたらしいのでした。老人は獨樂のやうにくるく廻つて、非常に大きい聲で歌を謡ひましたが、その聲は森ちうへ響き渡る位でした。それから、彼は王子をつれて出がけながら、途々絶間なく喋り續けましたが、それは、喋ることにはばかり氣を取られてゐて、その新しい雇人なる王子が絶えず袋から豌豆を路へ落して

行くのに向氣がつかなくなつた位でした。

二人は夜が來ると、大きい樹の下で寝て、日が出ると、直ぐ起きて路を續けました。正午頃になると、大きい石のあるところへやつて來ました。すると、老人は、其所で立ち止まつて、四邊をよく見廻してから、鋭く口笛を吹き、左足で三度地面を踏みました。

不意に石の下に秘密戸が現はれましたが、その戸口からは、窟の口らしく見えるところへと行く路がついてゐるのでした。老人は王子の腕をつかんで、荒々しく、

「隨いて來い。」と、云ひました。

周囲は眞暗でした。けれども、路は尙一層深いところへと行くのであるらしく、王子には思はれたの

でした。餘程してから、王子には、何か光がチラリとしたやうに思はれたのですが、その光は、日の光でもなければ月の光でもなかつたのです。王子は一生懸命にその光を見てゐるうちに、それはたゞ薄白い雲であることが分りました。この地の下の世界で



の光といふのは、たゞさういふ雲きりであつたのです。地面も水も、木も草も、鳥も獸も、王子がそれまでに見たものとはまるで違つたものでした。けれども、王子が最も恐しかつたのは、何處も何處も全く静な、何一つの音、何一つのそよぎも聞えないことでありました。彼方此方と、木の枝に鳥がとまつてゐるのが見えました。それは頭を真直にし、

の耳へは聞えて来ませんでした。夫は吠ようとするかのやう口を開け、牛は鳴かうとするかのやうに見えたのですが、吠える聲も、鳴く聲も王子の耳には決して聞えはしませんでした。水は音もせずには上を流れ、風は木の頂を吹き捲め、蟬や甲蟲が飛び

三〇

廻つてゐたのですが、なんの音もするのではなかつたのです。
長い白鬚の老人もなんも云はなくなつてしまひました。
王子は老人に、これは何うした譯だらうかと訊かうとしましたけれども、何うしても聲が喉から出て来ませんでした。



母子草

(推徳堂通)

高橋 五村



母が戀しい 母子草

貰られて町へ來は來たが

母こひしさに泣きました

屋根の瓦に 一本の

母こひしさの母子草

さびしき花に咲きました



岩と椎の實とミンく蟬の話

三島霜川

或るところに、古い椎の木なかが、こんもりと茂つた、いかにも閑静な森がありました。昔、大きなお寺のあつた跡なんださうですよ。わたしは、何んにも知らないのですけれども、その森のなかに、古いく昔から、コロリと轉つて、いつも黙つてゐる、あの、頑固な岩が話して呉れたんです。その岩は、夏になると、奇麗な、青い苔の衣を着たりして、木霊おかしをしてゐるんでした。そして、何うかした様子



三三

に、近所の椎の實や、その椎の木の枝に、ミン、ミン、ミンと啼いてゐるミンく蟬なんかに、斯ういふんですよ。「わしあ、何んだよ、あの、芭蕉の翁ツていふ、風流な、だが、そりや貧乏ツきたい俳諧師ツてえ奴が、へしづかさや、岩にしみ入る蟬の聲」と、讀むだ、その岩なんだよ。だから、さるぶん、古いわけさね。また、いろんなことも見て来たんだが」それが、自慢といふわけでもなかつたんですが、椎の實やミン蟬に見ると、それを聞かされる度に、何うも少し面白くなかつたのです。まあ、云つて見ると、岩の言葉が、だから、おれは何んでも知つてゐるよ」と云ふやうにも聞えたうしてゐるんだ」と。

のでした。それで、中ッ腹なミンく蟬は、岩が、その話をする度に「フ、ン、芭蕉の岩が、またやつて居やがら？ おれたちの見ないことだ、嘘だか、眞んとだか解るもんかい」と吐のなかで然う思ひながら、わざと聞かない振をして、ミン、ミン、ミンと、やけに、聲を張上げて鳴き出すのでした。椎の實の方は、まだ青々とした、それは、小ッほけな若い實」でしたから、おとなしく黙つてゐました。それでも、斯う考へてゐたのです。

「芭蕉の岩が、あんなことを云つて威張つてゐたつて、いつも地べたにくつゝいてゐるんぢやないか。それに、昔から些つとだつて動いたことがないんだ。世間のことが解るもんかい。それよか、おれなんざあ、斯うして高いとこに居るんだから、そりや廣い世間が見えるんだ」と。つまり、椎の實も、ミンく蟬も、芭蕉の岩を、眼下に見下して、輕蔑してゐたわけなんです。けれども、芭蕉の岩は頑固に自分を信じてゐました。誰が何んと云つても、おれは、芭蕉の岩だ。そして昔の昔から斯

やかましく鳴立てられたり、椎の若い實に「歌んまり」の輕蔑を受けたたりして、それは嫌なく思をするのでした。そして、腹の蟲の居所の悪い時などは、くわツとなつて、ミンく蟬を吹鳴りつけることもありました。「おい、少し遠慮しないか。おれの體へは、毎年々々、お前たちの其の聲が、しみ入つてゐるんだから、然うミンく、ミンく、鳴立てられては、うるさくて爲様がない。第一午睡の邪魔だ」すると、ミンく蟬は、一段と聲を張上げて鳴立てながら斯う云つて、やりかへすんです。「解らない爺さんもあつたもんだな。おれたちは、鳴くの

生まれて来たんだ。この夏のうち、どこへ行ッたッて、蟬の鳴いてるないところがあ
るんか。うるさければ、そっちで、遠慮し
て、どこへでも行くが可いぢやないか」

ミン／＼蟬は、鳴聲が高いばかりでなく、
口も達者なんでした。



芭蕉の岩は、「馬鹿にされきッてるるな」

と思ひながらも、口争では、とてもミン／＼蟬にかなはな
いことを知ッてゐましたから、それきり黙ッて了ふのでした
が、口惜しくて耐りませんでした。それでも昔の昔から、辛
抱をしッつけてゐましたから、いつも、ちツと辛抱してゐまし
た。

ミン／＼蟬は、それを好いことにして、ます／＼圖に乗つ
て、毎日々々、ミン、ミン、ミン、ミン、ミンとそれ
はやかましく鳴立てました。

芭蕉の岩は、まッたく困ッて了ひました。そして毎日、頑
固な顔を顰めきッてゐましたが、たうとう我慢がしきれない
で、若い稚の實に、こんな相談を持ちかけました。

「何んと、稚の
實さん、お前さ
んの木と、わた
しとは、もう古
い馴染なんだ。
何うか、この
老ほれを可哀さ
うだと思ッて、
あの、ミン／＼
蟬をお前さんと
ころから遊立て



てくれませんか」

その言方が、いかにも哀ッほく、そして大變に謙遜だッた
のですが、若い稚の實は、

「フ、ン」
と云ッた調子で、キツバリ断りました。

「そんなことは出来ないでせうよ。ミン／＼さんと、わたし
とは、友達なんですからね。それにミン／＼さんが、いくら
鳴いたからと云ッて、それは、あなたが、うるさいといふだ
けのことで、わたしにしても、世間にしても、そんなに迷惑
なこと、は考られませんか」

と、此う理窟ッほく云はれて、芭蕉の岩は、また赤恥を搔
いて、黙ッて了ひました。

「いま／＼しい奴等だ」とは思ひましたが、と、云ッて、何
うすることも出来ませんでした。

芭蕉の岩は、只、黙りこくッて、ちツと辛抱してゐるしか
ありませんでした。

夏が、だん／＼過ぎて行ッて、或る晩に、野分が、ごー
ッとして、稚の木に、ぶつかッて来ました。すると、少し黄ばん

でゐた稚の實の弱いのが、バラ／＼と落ちて、芭蕉の岩を撲
ちました。芭蕉の岩は平氣でした。

その頃から、ミン／＼蟬の鳴くのが、一日々々に静になッ
て行きました。

それで、いくら、ミン、ミン、鳴いても、芭蕉の岩は、も
う、うるさいとは、思ひませんでした。

それから稚の實は、毎日々々、子ども等に石をぶつけれ
て、怪我をしたり、地べたに落ちたりしてゐました。それを
見ると、芭蕉の岩は、少し氣の毒に思ひました。

そのうちに、恐ろしい暴風雨が、二度ほどやッて来ました。
そして、ミン／＼蟬の聲は、いつの間にか聞えなくなッて、
稚の實も、スツかり地びたに落ちて子ども等に拾はれて了ひ
ました。

芭蕉の岩は、「うるさい奴等が居なくなッて好い」とは思ひ
ましたが、しかし、

「おれは、芭蕉の岩なんだ」
といふ、その相手が無くなッて、淋しくてなりませんでした。
そして、世間も寒くなッて来ました。(をほり)

虎になつた鼠

個人が町を通りかゝると、子供が五六人、往來ばたに集つてがや／＼いつてゐました。何かと思つてのぞいて見ますと、小さな二十日鼠を縛でしぼつて、棒でついたたり、石をぶついたりきい／＼いばせて面白がつてゐました。仙人はかはいさうに思つて、

「あんまり小さいからいちめられるのだ。せめて猫だけの大きさがあつたら、さうひどい目に遭ふまい。」

といつて、猫をつかつてこの二十日鼠を大きな猫にしてやりました。だしぬけに鼠が猫に化けて逃げ出したもので、いたづらな子供達もびびりしてアツ／＼いばせながら、逃げ出してしまつた。



した。仙人は猫をつれて家へかへりました。それから三日してふと猫の姿が見えなくなりました。仙人はどうしたかと思つて、町を歩きながらそれとなしに氣をつけて見て行きますと、一軒家の門口に、その猫が壁中血だらけになつてひい／＼啼いてゐました。どうしたのかと思つて、そこらにあつた人にきくと、今し方五六疋の犬にとりまかれてひどい喧嘩をしたといひました。仙人はかはいさうに思つて、

思つて、いさ／＼考へた末、
「ばん鼠い虎にしてやらう」といつて犬を大きな、黄いろい虎にしてやつて、こんどこそは大丈夫だと安心してゐました。

犬も虎になつたので急にえらい元氣がついて、仙人のあとについてのも／＼町を歩きながら、鼠の籠を二つ曲べたやうな目をきら／＼光らせて、と、子供も大人もこぼがつて、右に左にあわて道をとげます。虎はいよ／＼とくいなつて、できるだけ物すごい聲を出して、う、う、うと啼りました。すると中で一人、この虎の素性を知つてゐるものがあつて、ふんと鼻の先で笑ひながら、



「なんだ、あいつはいくら大きな顔をしたつて、ついでないだま

でちつほけな二十日鼠で子供に捕まつて、もう少しで殺されそなふところを、あの仙人に助けられてどう／＼虎にまで出世した。思へば強いのい／＼奴、あつはッほ、といひました。
虎はこんな噂話を小耳に挿んで、くやつつてたまりません。これといふのもあの仙人があつたからだ。いつそおれの本の素性を知つた仙人めと、顔口をさく奴を丹しくからくひ殺して明日から天下は一本立ちの虎の王様で威張つて歩いてやらう」と、かう考へて、虎は虎は仙人の腹思をうかつて、いきなりその喉筋にくらひつきました。けれども通力自在な仙人がそんなことでひるむ筈がありません。いきなりはれ起きて、
「この小鼠め、何を爲る。」といふなり、足を上げて蹴かへしますと、虎はころ／＼と轉けてまた元の小つほけな二十日鼠になつて、ちよろちよろ駆けまはりました。
偉くもないくせに、まぐれ富りで偉くなつて元の身分を忘れるこの二十日鼠のやうな馬鹿者が人間の仲間にもよくあります。



乞食の子が伯爵 になつた

齋藤佐次郎

「だけれど、狐さん、お前さんにやつてしまふと、僕は食べ

るものがなくなつてしまふよ。」と、息子がいひました。

「まあ、私にまかせてお置きなさい。私はそれであなたを

仕合せにする事を知つてゐるのですから。」

狐があんまりいふので、息子は大機さうに立上つて、眞黄

な梨の實をいくつかもいで来て、粗末な籠へ入れてやりまし

た。狐は息子にお禮をいつて、口籠をくはえて、チヨコチ

ヨコと王様の御殿へ行きました。そして、眞直ぐ王様のお目

通りへ出ました。

「王様、私の主人が梨を献上したいと申しますので、持

つて参りました。」

狐はかういつて、梨の入つた籠を王様の足元へ置きました。

「梨だつて、この季節に！」

王様はびつくりして籠の中を覗きこみました。

あるところに、乞食のやうな暮しをしてゐた一人の百姓が

ありました。この百姓にはたつた一人の息子がありましたが、これが怠け者で、馬鹿で、何をいひつかつても、決して

働くやうな男ではありませんでした。

百姓は間もなく大病になつて死にました。貧乏でしたから

何にも後へ残して行つた物はありませんでしたが、それでも

壊れた家と一本の梨の樹がありました。

息子はおやぢが死んでも相變らずゴロ／＼してゐました。

お腹がへると梨の樹の上つて、おいしさうに熟した實をむし

やむしや食べました。ところで、この梨の樹は不思議な樹で、

一年中後から／＼實が出来て、おまけに普通の樹のとは比べ

もつかない程おいしいので、息子は食物に困る事がありました。

雪がたくさん降つた冬のある日、山から出て来た狐が、通

りがかりに梨の樹を見つめました。

「おや／＼、おいしさうな梨ですね。私に籠へ一ばい下さい

な。きつと、あなたを仕合せにしてあげますから。」

狐が息子にいひました。

「伯爵は欲しいものは何でも持つてゐらつしやいます。伯爵

はあなたよりも金持ちでゐらつしやいます。」

「それでは梨のお禮に何を贈つたらいいだらうな。」

「何もいりません。却つて伯爵のお氣遣を悪くするといけま

せんから。」

「そうか、それでは私が心からお禮をいつてゐたと言つてお

くれよ。それからまた、私がどんなにおいしく食べたかとい

ふことも傳へておくれよ。」

狐は叮嚀にお辭儀をして、王様の御前を退りました。

狐は空の籠を持つて、息子のところへ歸つて、すつかりの

話をしました。しかし、息子の方では「何んのこつたい」と

いつたやうな話らなさうな顔をして、

「何にも持つて来てくれないのか。僕は腹がへつて仕方がな

いや。」と、いひました。

「まあ、もう少し私にまかせて置きなさい。私にはあんな

とわかつてゐるのだから。きつとあなたを仕合せにしてあげ

ますから。」狐はさういつて、歸つて行きました。

四五日たつと、狐がまた来ました。
「もう」と籠、梨をくれなくてははいけません。」と、狐がいひました。

「だけれど、狐さん、皆な梨を持って行かれると、僕の食ふものがなくなつてしまふぢやないか。」

「まア、落ちついてゐらつしやい。萬事はうまく行きますか。」

「さう、狐はいつて、前よりもつと大きな籠を出して来て、それに一ぱい梨をつめました。」



それから、籠を口にくはへて、チョコ／＼と王様の御殿へ行きました。

「王様は、梨がお好きのやうでございますから、もう」と籠持つて参りました。伯爵が王様によろしくと申しました。「と、いつて狐が梨の籠を出したので、王様はいよく／＼びつくりして、

「驚いたね、この雪の深い時に梨がそんなにとれるのかね。」と、仰しやいました。

「ナニ、それ位なんでもありません。伯爵は金持ちですからどんな事でも出来るのでございます。さて、今日私が参りましたのは、王女様を伯爵のお嫁に下さるやうにお願ひに伺つたのでございます。」

「しかし、本當にお前の主人が私よりも金持ちだとすると、折角だが、お聞きしなければなるまい。私の名譽をおとすといけないからネ。」と、王様が仰しやいました。

「王様、さうお考へになつてはいけません。持参金のことなど御心配になつてはいけません。ピロ伯爵は、王女様さへいだければそれでいいので、その時には私も目撃してござい

録つて行きました。

「私はあなたのことをピロ伯爵だといつて王様に話して来たのです。それから、王女様をあなたのお嫁にほしいと言つて来ました。」

狐の話聞いて、息子はすつかりめんくらつて了ひました。

「おい／＼、狐さん、お前何をいつて来たのだい。王様は僕を見たら、きつと首を切つてしまへと言ふよ。」

「いゝえ、決してそんな事はありません。私のいふ通りにさへすれば、大丈夫です。」

狐は萬事を呑込んでゐるやうに、落ちついていひました。

狐はそれから町へ行つて、一番上手な洋服店へ行きました。

「私の主人のピロ伯爵がお前の見世にある一番値段の高い着物をすぐに届けるやうにとのお言葉だよ。」狐は横柄な様子をしていひました。「それで、もしお氣に入れば明日すぐと金を拂つてやる。だが、大變にお急ぎでゐらつしやるから、持つて来てもらつたのでは間に合はない。私が自分で持つて行く。」

この洋服店は伯爵のやうな身分のある人に品物を賣つた事がないので大喜びで、すぐと家中にある品物を出して来まし



ません。」と、狐がいひました。

「伯爵は持参金がいらぬ程金持ちなのかネ。」

「王様は、もう一度おき／＼になりませう。」

「伯爵はあなたよりもお金持ちだと申しあげたではございませんか。」

狐は少し怒つたやうに答へました。

「さうかい、では一しよにお話しをしたいと思ふから、伯爵に来ていた／＼けないだらうかね。」

王様がかう仰つしやつたので、狐は急いで息子のところへ

た。そこで、狐は金と銀の織で織つた綺麗な服を選び出して、それを包にくるんで、口にくはへながら洋服店を出ました。狐は、それから今度は馬を賣つてゐる家へ行つて、自分の主人が王様のお招きで御殿へ行くのだからといつて、一番きれいな馬を息子のゐる小屋まで届けるやうにいひつけました。

三

さて、息子のピロ伯爵は、いや／＼ながら服を着て、馬に乗つて、王様に遇ひに出かけました。狐は馬の前をチヨ／＼断けて行きました。

「僕は王様に何といつてお話しなさい、のだらうね。僕はこれ



まで王様なんかと、一度だつてお話などした事がないのを、お前知つてゐるだらう。」

息子は心配さうにいひました。「何にもいつてはいけません。口をきくのは私に任せて置けばいゝのです。たゞ、お早うございます。王様とだけいへばいいのです。」

かういつてゐる間に御殿へ着きました。王様はピロ伯爵を迎ひに玄關まで出て来て、二人を大廣間へ案内しました。そこには御馳走が一ぱい列んでゐました。王女様はもう前からそこへ来てゐましたが、ピロ伯爵と同様」と言ひ口をきゝませんでした。

「伯爵はあんまり口をおきゝにならないネ。」

おしまひになつて、王様がそつと、狐に仰しやいました。

「伯爵は御自分の領地内のことを始終お考へになつてゐらつしやるので、それで普通の人のやうに口をお聞きにならないのです。」

狐はかういつて、辯解しました。

王様は、それですつかり御満足なすつて、食事を終へました。間もなくピロ伯爵と狐は歸つて行きました。

四

翌日になりました。狐はまた息子のところへ来て、

「もう一と籠梨をくれませんか。」と、いひました。

「いゝとも、持つてお出で。だけれど、狐さん、それをやつてしまふと、僕は食べる物がなくて死ぬかも知れないよ。」

「まあ、萬事は私に任かせて置きなさい。終ひには、きつと、あなたに仕合せが来るから。」

狐はさういつて、梨を持つて王様のところへ行きました。

「主人のピロ伯爵がこの梨を献上いたします。それから先日申しあげたことの御返事を伺ひに参りました。」と、狐がい

ひました。

「それは、御苦勞だね。伯爵にお傳へしておくれ、結婚式はいつでもそちらの御都合のいゝ時に乗けるからとネ。」

王様がかう仰しやつたので、狐は大威張りで、返事を傳へに息子のところへ戻つて来ました。

「しかし、こゝへ女王様をつれて来るわけには行かないぢやないか。」息子は困つた顔をしました。

「いゝから私にまかせて置きなさい。これまでだつて、巧くやつて来たぢやありませんか。」狐がいひました。

五

王様の御殿では、ピロ伯爵と王女様の結婚式のため大層な支度をしました。息子のピロ伯爵はたうとう王女様と結婚しました。

一週間の間お祝がつかましました。ある日、狐が王様にいひました。

「私の主人は花嫁様を御自分のお城へつれて歸りたいと仰しやいます。」

「それは結構だ、私も一しよに行かう。」

王様はすぐその支度をおいひつけになりました。厩からは御自分とピロ伯爵と王女様のために一番上等の馬を引出すように命令をさいました。

そこで、一同は打揃つて出立して、廣い野を横切つて馬を進めました。狐は皆なの前をチヨコ／＼かけて歩きました。小山の上に、羊が何百匹となく、いゝ氣持ちさうに草をたべてゐました。狐はそれを見つけたので、ビタリと立上りま

した。

「その羊は誰のたい。」と、狐が羊飼にききました。

「人喰鬼のだよ」と、羊飼が答へました。

「フーン……」狐はわざと不思議な様子をして「お前さん、向から馬に乗つた人達が、大勢来るのが見えなかい。もし、あの人達にその羊が人喰鬼のものだといつて御覽、それこそ羊を皆な殺されてしまふから。さうすれば、鬼は怒つてお前さんを殺すだらう。だから、悪い事はいはないから、もしきかれたら、羊はピロ伯爵のものだといひなさい。皆なの爲めになるのだから。」



狐はかういひすて、急いで捕て行きました。

間もなく王様が來ました。王様は豚を御覽になつて、

「なんていい豚だらう私の牧場にゐるのより肥えてゐる

に

それは誰のものかね。」と、仰しやいました。

「ピロ伯爵のですよ」と、豚飼が答へたので、王様はまたいゝ顔を持つたと喜びになりました。

狐は今度は前よりも、もつと急ぎ足に駆けて行くと、花の

にかけて行つてしまひました。

間もなく王様がお出でになりました。

「何んて綺麗な羊だらうね。王様は馬をとめて御覽になりました。私の牧場にはこんな綺麗なのがゐない。一たい、誰のものなのだらう。」

「ピロ伯爵のものです。」

羊飼は王様とは知らないで答へました。

「そうか、伯爵は大層なお金持ちだな。王様は感心してしまひ、かういふ偉い人を尋に持つたことを喜びました。

その間に狐は、樹の根元で鼻をク／＼やつてゐる澤山の豚のゐるのを見つけた。

「その豚は誰のたい。」狐が豚飼にききました。

「人喰鬼のだよ」と、豚飼がいひました。

「フーン……君には向から馬に乗つた人が大勢来るのが見えなかいのかい。もし、あの人達にその豚が人喰鬼のものだといつて御覽、それこそ皆な殺されてしまふから。さうすれば、鬼は怒つてお前さんを殺すだらう。だから、もしきいたら豚はピロ伯爵のものだといひなさい。」

一ぱい吠いた牧場があつて、馬が澤山草をたべてゐました。

「それは誰の馬のたい。」狐は番をしてゐた男にききました。

「人喰鬼のだよ」と、番人が答へました。

そこで、狐は羊飼や豚飼にいつたと同じことをいひました。

「あ、何んて愛らしい馬だらう。かういふのを私も持ちたいものだな。一たい、誰のものかね。」

「ピロ伯爵のですよ」と番人が答へたので、王様ははく／＼してお喜びになりました。婿の馬なら自分のものも、同じだとお思ひになつたからです。

たうとうお終ひに、狐は人喰鬼のお城へ來ました。狐は目

に一ぱい涙をためて、お城の段々を昇つて行きました。

「おう／＼、あなた方は何といふお氣の毒な御身分でせう。」

狐は泣き／＼いひました。

「何か起つたのかい。」

人喰鬼はふる／＼聞へながらききました。

「あなたには馬に乗つた人が大勢来るのが見えなないので、あの人達は、王様のいひつけであなたを殺しに來たのです。」

「あゝ、どうしよう、どうしよう。狐さん、狐さん、私達を助けておくれお願ひだよ。」鬼夫婦は泣いていひました。

「よござんす、出来るだけの事はしてあげます。あなた方二人が、隠れるのには大きなお釜の中が一番です。兵隊が行つてしまつたらすぐ出してあげます。」

鬼夫婦が、あはて、お釜の中へ這込みましたから、狐は蓋をして鍵をかけてしまひました。丁度そこへ王様がお着きになりました。

「どうぞ、こゝでお馬をお降り下さい。これがピロ伯爵のお屋敷でございます。」狐は叮嚀にお禮をしていひました。

王様は部屋の中を見廻しなすつて、

「成程、これは私の住居よりも立派だ。しかし、どうして召使ひの者が一人もゐないのだらうね。」

六

翌朝になると、狐がピロ伯爵にいひました。

「あなたは、もうお金持ちで仕合せな身分になりましたから私の必要がなくなりました。私はお別れして、他所へ行きます。しかし、死ぬ前に約束していたよきたい事があります。私が死んだら、これまでのお禮に立派な棺をこしらへて、相當の禮儀をつくしてお葬ひをすと約束して下さい。」

「まア何をいふんです、可愛い狐さん、死ぬなんていつちやいや！」王女様は泣かないばかりにいひました。狐のことをそれはく可愛がつてゐたからです。

それから暫くたつてから、狐はピロ伯爵が本當に自分のことを有難く思つてゐるかどうか、ためして見たいと考へてお城へ行つて、入口の段々のところへ倒れて、死んだ真似をしてゐました。丁度そこへ、王女様が散歩に出ようとして出て来て、狐が倒れてゐるのを見たものですから、「ワアッ」と聲をたて、泣きながら、狐の傍へ来て介抱しました。

「私の可愛い狐さん、あなたには世界中で一番きれいな棺をこしらへてあげますよ。」といつて王女様はまたおいしく



四六

は王女様が御自分でお運びになつた方がよいとお考へになつて、これまでのを皆な返してしまつたからでございます。」かう狐が答へたので、王様は成程とうなづきになりました。王様はすつかり御安心になつて、新夫婦をお城へ残して、ちきにお歸りになりました。

さて、日が暮れて、あたりが薄暗くなりました。狐はそつと梯子段を降りて行つて、竈に火を焚きました。釜の中の鬼夫婦はたまりません。怒り盛んにされてしまひました。

泣きました。ピロ伯爵も出て来て、狐の死體を見て、「何だ黙に棺をこしらへてやるんだつて、そんな馬鹿々々しい事があるものか。脚をつかんでドブの中へたゞき込んでやれば澤山だ。」といひました。その言葉を聞いた狐は、むく／＼と起上つて恐ろしい顔をして叫びました。

「この悪者め！ 思知らずの乞食め！ お前を仕合せにしてやつたのは、みんな私だといふ事を忘れたのかッ！」

ピロ伯爵はふるへ上りました。狐が怒つて、お城をとりあけて、梨ばかり食べてゐた昔の乞食にもう一度してしまふかと思つたからです。伯爵は狐の怒つてゐるのをなだめようと思つて、今は皆な戯言で、本當に死んでゐるのではないと知つてゐるから、わざといつたのだと言つて謝りました。

狐は王女様の心が本當にやさしかつたので、氣嫌を直してそれから何年もの間、皆なと一しよにお城で暮すことになりました。その内にピロ伯爵の子供たちが大勢出来たので、その遊び相手にもなりました。そして、狐が本當に死んだ時には、銀の棺をこしらへて、ピロ伯爵と奥方が墓場まで見送つたといふことです。(をほり)

ひとりのじめ
船橋重一

1 おかあさまが ごようして
しまふまで、これを しやぶつ
ておとなしく、まっ
ておぬで、あまく
ておいしいのよ
いよこだからね



2
ぶち「しろくん
うまさうだね」
しろ「うまさうだね
ほくたちもほしい
ネ」
ぶち「ひとりじめして
うらやましいネ」
しろ「ほくたちでよこ
どりしようか」
ワ〜



3
しろ「そつと
そつと、なかせる
とおかあさま
がくるぞ
なくよ〜
またしかられる
からよせよ」
ぶち「しつかに
だいぢよぶ、うま
くやよ」



4
しろ「うまくやつたか
い ほらないだね」
ぶち「ちよいと
ほくたちにも
しやぶらせて
くれたま〜」
ワ〜



はち「おや
おや わる
いいだね」

しろ「ばや
くにげる」
ワ〜
ワ〜
ワ〜



6
しろ「おく
ちのまはり
につい
てある
ちよい
とな
めて
やらう
お〜
あまい
あまい」





しろ「おや
おかさんが
きたやうだ
ぶちくん
どつちだい」

ほら「かは
いさうに
どろばうしナ
うへにみつ
までぶつかけるな
んで あんまりだ」



8
しろ「おいき
みちよいと
なめさせろよ
にげらなんて
づるいよ
おい〜
ひとりじめは
いけないよ」



9
しろ「あ
あまい」
ぶち「ほくが
とつたんだよ
かへさないよ
くひつくぞ〜」



10
しろ「だが
まけるかい
さあこい」

ぶち「かへせ
おつなよいき
なひっばり
つこかいま
けないぞま
あこいワン〜
ワン」



11
キヤン〜
ほら「こいつも一つ
どうだ」
ぶち「あ〜いたい
いたい〜こめん



12
ほら「こんどは
ほくがひとりじめだ
お〜あまい〜」



源氏の四人若君

窪田空穂

今、ここにお話するのは、保元の亂のあつた後に起つた、あはれな、しかし健氣な一つのお話です。

保元の亂といふと、讀者のうちには、もう教科書で習つて知つてゐる方もありませうが、我國の歴史の上でも、名高い軍の一つです。それは、一度天皇の御位をお譲りになつた上皇が、今一度御位に即かれるか、又は、御自分の皇子を御位に即けたいと思召して、天皇に對して軍をお起しになつたのがそれです。天皇は無論、それに應戦なさいました。上皇と天皇の、朝をうけて戦つたのは、源氏と平氏です。その源氏と平氏とは、同じ一家でありながら、敵と身方とに分れて戦ひました。そして、その軍のあつたのは、京都の町の中でした。

此軍のあつたまでの何百年かのあひだ、第一、京都で軍をしようと、いふやうなことはありませんでした。それだけでも、その當時では大變なことでした。それを突然に軍が起り、そして、する者といへば、恐れ多くも上皇と天皇とです。まことに例のないことでした。そして、弓を引き、刀を振つて、切り合ひ、殺し合ふ侍はといふと、昨日までは仲をよくし合つてゐた、親と子、兄と弟、叔父と甥とい



ふやうな關係の者たちでした。これは、その當時で大變であつたばかりではなく、後々までも例の少いことであつたわけで名高い軍となつてゐるのです。

上皇は、崇徳上皇、天皇は後白河天皇です。上皇にお付き申した侍は、その時に源氏では第一の人であつた源為義、為義の四番目の男の子から九番目の男の子まで六人、その中には名高い、鎮西八郎為朝も加はつてゐます。又、平家の方では、平清盛の叔父の平忠正も上皇にお付き申しました。天皇の方にお付き申し

たのは、源氏では、源為義の惣領、源義朝、平氏では平清盛がお付き申しました。

戦は一日一晩で済んで、上皇方の負けとなりました。これは、上皇が、為朝の計をお用にならなかつた爲に、義朝に敗られてしまつたのでした。負けた上皇の方は、ひどい扱ひを受けました。上皇は、讃岐へ流されました。上皇がそれ位ですから、上皇へお身方した侍は、その侍はもとよりのこと、小さい子供までも、男の子はみんな探し出して殺してしまひました。

平忠正を殺す役を仰せつかつたのは、その甥の平清盛でした。源為義と、その子供とを殺す役を仰せつかつたのは、為義には子であり、子供には一番上の兄である源義朝でした。義朝は出来るだけお詫びをしましたが、朝廷ではお許しがなく、自分で殺すのがいやなら、他の侍に殺させようと仰せられるので、爲方なしに殺したのでした。先へ殺したのは、父の爲義で、それに續いて、爲朝だけを除

けた五人の弟を殺しました。爲義はその時には、病
氣で逃げられないので、僧となつて、義朝をたまつ
て降参して来たのでしたが、それでも許されずに殺
させたのでした。

義朝は、そればかりではなく、爲義の幼い子供で、
まだ四人だけ残つてゐる男の子をも殺さなくてはな
らないことになりました。これからお話ししようとする
のは、その四人の男の子が殺された時の有様です。

二

父の爲義を殺した翌
日でした。御所からの
お召があつたので、義
朝は伺ひますと、役人
が勅を傳へました。
それは、お前にはまだ
大勢の弟があるが、た
とひ幼い者でも、女の
子を餘りた外の者は、



をさせるな。
かう云ひつけられますと、延景は、つらい役目を
云ひつかつたものだと思ひました。しかし、主人の
云ひつけだから、いやとも云へないと諦めましたが
それでも涙がこぼれました。若君たちを乗せる爲に
と、輿を昇かせまして、四五十人ほどの下役の者を
引き連れて、六條堀川の邸へ出懸けて行きました。
堀川の邸では、誰もまだ、昨日爲義が殺され、一
昨日五人の子供の殺されたことを知つてゐる者はあ
りませんでした。爲義の奥方は、夫の無事を祈らう
と思つて、今朝早く八幡宮へ参詣に出懸けて行つた
あとで留守でした。それで邸にゐる者は、四人の若
君と、若君の一人一人に附いてゐる守役の侍だけ
でした。

四人の若君といふのは、一番上は乙若と云つて、
十三でした。二番目は鶴若といつて十一、三番目は
鶴若といつて九つ、一番末は天王といつて七つで
した。



延景が、何気ない様子をして、輿を
出しますと、四人の若君は延景を見附
けました。これまで朝晩に出入りして
ゐる延景ではあるし、それに此頃は、
誰も来る者もなくてさむしがつてゐた
ところですから、若君たちは、みんな
嬉しうな顔をしました。
延景はその様子を見ると、途々考へ
て来た拵へごと、口へ出なくなりま
した。だが、思ひ切つてそれを云ひま
した。
「今日は私は、大殿(爲義のこと)から
のお使で参りました。かやうでござい
ます。大殿には、比叡山で髪をお剃り
になりました、それから頭殿のお邸へ
入らつしやいました。たゞ今のところ
は世間に遠慮をしなくてとは申すこと
で、北山の雲林院と申すお寺にお忍び

になつて入らつしやいます。大殿には皆様方のことをお案じ遊ばしますので、御無事な御様子をお目に懸けるために、お連れ申さうと思つて、お迎へにまゐりましたのでございます。」

「さうか、」と一番上の乙若は、第一に云ひました。「お前のいふ通り、お夢をお下しになつたといふお噂は伺つたが、軍からこつちは、一度もお姿を見ないので、みんなして戀しがつてゐたところだ。さ、參らう。」

と云つて、四人の若君は、我れ先にと争つて輿に乗りました。そして、輿のなかから「急げ、急げ」と云つて、輿を昇く者を急かせました。

輿は、大宮を上つて、北山の舟岡山へ昇き上げました。そして、峰からは東に寄つた平なところへ下しました。延景は、ここで殺さうと思つたのです。しかし、何と云つて譯を知らせたらいいだらうと當惑してゐますと、一番末の天王が、第一に輿から走り出ました。

ちを殺してしまふのか、四人を助けておくと、百騎の家來よりも篤にならうに、このことを云つて上げよう。」

と云ひますと、二番目の鶴若も、

「本當に、もう一度使をやつて、たしかに殺すか何うか聞いて見よう。」

と云ひました。それを聞くと、一番上の乙若は、

「いくちの無い奴らめ、何をつまらんことを云ふ。

我々の家に生れる者は、小さくても心は強いと云はれてゐるではないか、愚痴なことを云ふな。」と叱りつけました。そして、弟たちに諭すと一しよに、延景などにも聞せるやうに、「世の中の人情が分り、自分の末々のことも思つたならば、六十を越した父上が病氣のために出家して、頼つて入らしたといふのに、それを斬つてしまふやうなことは出来ない。それさへする分らずやが、何だつて私たちを助けなぞするものか。あゝ、悲しいことをする頭殿だ。これはきつと、清盛が讒言でさせることだらう。大勢の

「父上は何所にいらつしやる。」と、尋ねました。それを見ますと、延景は堪らなくなつて、涙を流しまして、暫くのあひだ何も云へずにおりました。思ひきつて、

「もうお隠し申してはゐられません。本當のことを申しますと、大殿は、昨日の明方、頭殿が勅命を蒙つて、お斬り申しました。お兄上方も、八郎様を除けたお五方とも、昨夜、あの見えまする山の下のところでお斬り申しました。あなた方も、同じやうにお斬り申すことになりましたが、頭殿が、だまし連れ出すやうにしろ、つらい思ひはさせなと、くれぐれも仰しやるので、大殿のお使だと嘘を申上げたのです。何でもお思ひになりますことは、この延景にお聞せになりました、何方もお念佛をなさいまし」かう云ふと、あとの三人の若君も、輿から出られませんでした。

三番目の鶴若は、

「下野殿(兼頼)のことにへ使をやつて、何だつて思た

弟を殺させて、たつた一人にしてしまつた後で、何かの折に殺してやらうといふ計からだらう。それともさとらずに、私たちまでも殺してしまふのは、残念なことだ。もう二三年も立つて見ろ、子供ではあつたが乙若が、舟岡山で能くも云つたと、きつと思ひ合せることがあらう。それにしても、下野殿が撃たれてしまふと、源氏が亡びてしまふが、それが如何にも残念だ。」

乙若はさう云つて、又改めて三人の弟に向つて、

「嘆くな、父上も撃たれておしまひになつた、もう誰も見てくれる者はない。兄上たちも斬られてしまつた、そして、情を懸けてくれるべき頭殿は敵だ。今はもう、此れが領地といふ所もあるまい。それだと、たとへ命は助かつて、乞食同様の身になつて迷つてあるくより他はない。そんな身になつて、あれが爲義の子供だと、人に指をさして笑はれるやうだと、それこそ家の恥といふものだ。父上を戀しいと思つたら、西へ向つて念佛を唱へて、極樂で父上

と一しよに生れ合ふやうに願へ。」
 乙若が、兄らしくさう云ひきかすると、三人の幼
 い弟に聞き分けて、云はれた通りに、西の方へ向つ
 て掌を合せて拜みました。その有様を見ると、五十
 人ばかりの附添の侍も、みんな泣いてしまひました
 四人の若君の守役は、それぞれ自分の若君の側に
 走り寄りました。そして、せめて最期のお姿を美し



くしようと思つて、濡れた髪をなほし、髪のため
 に流れ出る汗を拭いて上げなどしましたが、ほん
 の小さい時から抱いたり撫でたりして来た若君が、
 今を世の限りにして斬られてしまふのかと思ふと、
 聲を立てても泣きたい程でしたが、自分が泣いたら
 若君も泣くだらうと思つて我慢して、涙を隠し隠し
 何も云はずに世話をしておりました。

支度が出来たのを見ると、乙若は延景に向つて云
 ひました。

「自分が先へと思ふが、これらが見て、子供心に怖
 がるだらうと思つてかわいさうだ。それに、云ひ残
 したいこともあるから、これらを先へしよう。」

延景は、刀を抜いて、三人の若君の後へ廻りまし
 た。守役は、

「目をおふさぎなさいまし。」
 と云つて、側を離れました。

三人の首は、前の方へ落ちました。
 乙若はその有様を見て、少しも慌てませんでした





そして、
「見事に斬つたものだ、自分をもあゝいふ風に斬るだらう。」

さう云つて、そこにあつたほか、(首を入れる器)を見て、

「あれは何だ。」

と聞きました。

侍がほかるを持って來ました。

乙若は、そこに轉がつてゐる首の、血の附いてゐるのを自身で拭いてやり、髪を撫せてやつて、

「かわいさうな者たちだ。これほど運悪く生れて來たのか。」

と云つてとむらつてやつて、言葉をつゞけて云ひました。

「自分の今斬られるのは何でもないが、後でこのことをお聞きになつて、母上が嘆かれることを思ふとたまらない。乙若は命を惜んで、後から斬られた人はおふかも知れないが、全(ぜん)くさういふわけではな

にして、その上へ名前を置きつけて、延壽に渡し

した。
「又、口上で申すことは、今朝お供をしましたならば、何れ斬られます時に、最期の様子を御目に懸けるやうなことになるだらう。それだと、双方とも、却つて悲しい思ひをさせう。お留守にお別れ

するの、一つの幸です。この十年のあひだ、暫くもお側を離れなかつたのに、最期の時にお目に懸れないので、お心残りもありませんが、これは、氏神

八幡宮のお計ひだとお思ひになつて、餘りに嘆きにならなくて下さいまし、來世は又一しよになりますやう、お念佛下さいまし。かう申上げる。」

乙若はさう云つて、

「みんなが待ち遠がつて居よう早く、早く。」と云つて、三人の死骸の中へ入つて、並んで坐つて念佛を唱へました。

その念佛が、三十遍ほどになつた時、首は前へ落ちました。(なほり)

い。かうしたことを云ふにつけても、又自分の斬られるのを見るにつけても、せつなく泣き止んだ者たちが、又泣き出すだらうと思つて、それが氣の毒さに後へ残つたのだ。
母上が、今朝八幡へお詣りになるにつけて、一人が附いて行かうと云へば、外の者も附いて行かうといふ。それで、連れるならみんな連れて行かう、連れないならば一人も連れまい、片恨みになるからと云はれて、私たちの寝てゐるうちにお出懸けになられた。お歸りになつたら、さぞ私たちをお探しにならう。私たちも、こんなことがあらうとは思はなかつたから、思つてゐることも云ひ置きもせず、形見も上げなかつた。父上がお呼びになるといふので、ただもう嬉しがつて與へ乗つてしまつた。さういふわけだから、これを形見だと云つて差上げる。」
さう云つて、弟たちの額のところの髪を切つて、それに自分の髪も切つて添へました。
「若し間違ふといけない。」さう云つて、包みを別々



お家もお庭も野も畑も
 ぶらさがりこした牧場の門。
 ホンプに厩、庭木にプランコ
 皆さんさよなら、左様なら。
 それから君にもお別れだ。
 枯草小屋の梯子段。
 蜘蛛が巣かけた枯草置場。
 皆さんさよなら、左様なら。
 バチリ鞭が鳴る、さあ出かけよう。
 お家も立木もだん／＼小さく
 とう／＼並木の曲り角。
 皆さんさよなら、左様なら。
 (ステイ・グンソン)



とう／＼おもてに馬車が来た。
 はしやいだ子供がころげ込む。
 キスし合つたり唱つたり
 皆さんさよなら、左様なら。

田舎よ、さよなら

内藤豊雄

姓名判断

六回

山野虎市



郡の近くに、小さい丘でかこまれた淋しい平和な村がありました。此村に大きな學校があつて、毎日五百人ばかりの生徒が、一心に勉強してゐました。

生徒の中に、悪太郎といふ勝負な子供がありました。學校へ出ても、ちつとも勉強しないで、喧嘩ばかりするので、生徒達の皆ながら除けものにされました。

先生達も、初めのうちは悪太郎を活澄な兒だと言つて、可愛がつてゐましたが、餘まり腕白をするので、たうとう、「悪太郎は仕様のない兒だ」と言つて、毎日々々叱りました。

生徒からも教師からも、憎まれものになつた悪太郎は、もう家へ歸つても、お父様からも、おつ母さんからも、下女下

學者で金持である名前をつけて下さるに違ひない。

悪太郎は、早くそんな宜い名前をつけて貰ひたいと思つて、すん／＼と道を急いでゐますと、大きな樹の下に校長様がるるのを見つけました。暖かい日光が繁つた葉影を洩れて、春の花の甘い匂ひが、心を淨立たせるやうに香りました。

悪太郎の來たのを見た校長様は、軽く點頭いて、

「お出で！ 悪太郎さん、あなたは何だか私に話へたい事があるらしい。早くお話しなさい。私は屹度、あなたの爲になるやうにしてあげます。」と申しました。

そこで悪太郎は、自分が生徒達にも、先生達にも、兩親からも、下女下男からも、隣りの人達からも、皆な思ひ嫌はれてゐる事を詳しく話しました。

詳しい話を一々點頭き乍ら聞いてゐた校長様は、

「宜しい、それなら、あなたは、諸國を旅行して來るがよい。そしてあなたの性質と運命とを變へ得るいい名前を見つけた時、私にそれを教へて下さい。」と申しました。

悪太郎は大變喜びました。

「私は諸國を歩き廻つて、一番いい名前を見つけて來よう。」

間違からも、嫌はれものになりました。

悪太郎は考へました。「もう私を可愛がつて下さる人は、此世の中に誰一人もゐない。けれども、あの校長様だけは、まだ一度も私を叱つた事がない。私はあの校長さまの所へ行つて、私の名前を變へて貰はう、私が皆ながら嫌はれるのは、私の名前が悪いからだらう。私の名前が悪太郎だから、私の性質までが、こんな悪い人間になつたのだ。屹度さうだ。あの優しい校長様は、きつと私が善人になるやうな、善い名前をつけて下さるに違ひない。」

悪太郎はこんな事を考へながら、或日校長様の所を訪ねました。行く道々悪太郎は、

「善い人になるには、善吉、偉い人になるには英雄、賢い人になるには賢吉、壽命の長いのは長吉、學者になるには大學、金持になるには富之助……福助……金右衛門……」

などと、それからそれへと幾つも／＼自分の名前を教へ上げて見ましたが、それはもう皆な世間にサラにある名前ばかりでした。

「そんな名前では駄目だ、校長様は屹度、私に善人で英雄で

六五



かう言つて、悪太郎は家へ走り歸りました。そしてお父様にお話すると、お父様も早速其の願を許しました。

悪太郎は勇んで家を出ました。そして村から村へ、町から町へ、今まで見なかつた珍らしい物を見たり、いろ／＼な職業の人達に出會つたりして、別に退屈もしないで旅行を續けました。

或日悪太郎は墓場の傍を通りました。すると大きな石碑に、「長世不死男之墓」と刻りつけてあるのを見ました。

「おや／＼、長世とは、いつまでもいつまでもといふ事で、不死男とは死なないといふ事なのに、それに此の不死男さんは死んで此所へ葬られてしまつたのだ。」と思ひました。其時其所を通りかゝつた一人の老人があらまなので、悪太郎は其の老人を呼止めて、

「もし／＼老人さん、不死男といふ名前の人でも死んぢやうんですか。」と尋ねました。すると其の老人さんは、ハ、ハ、と大きな聲で笑ひながら、

「不死男だつて何だつて死ぬだらうぢやないか、名前つて人間の符號だもの、俺の右隣にはお金といふ妻さんが年が年中

貧乏ばかりしてゐるし、左隣りには大吉といふ小男がうるし向ふ隣りには確有新門といふ病人が居るんだら、政治といふ男も居るが、政治の事は、ちつとも知らねえで、村會議員にもなれねえんだよ。此間も正直といふ男が、盗みして監獄へ入つたからなア。なアに坊つちやま、名前などは、どうでも宜いよ。人間は心が第一だからなア。」と言つて、墓場の横の細路を田圃の方へ出て行きました。

悪太郎は其の話を聞いて少しく感心致しました。けれどもそれは、あの老人さんが無學だから、本當の事を知らないんだと思ひました。

悪太郎は次の村へ入りました。すると村の入口の家から、きやー、きやーと大人の泣聲が聞えて來ました。何だらう？と思つて隣の家の主人らしい人に聞いて見ますと、

「あれは、あすこの蓮葉娘が、お父様に打たれてゐるんですよ。」と答へました。

「其の娘の名前は何と申しますか。」

「お樂さんですよ。」

「え？ お樂さん？ お樂さんが、そんなに苦しい目にあふ



のですか。」

「あなたは馬鹿ですネ。お樂だつてお福だつて心の曲つた奴は曲つてるんです、名前なんて、人間の符牒だもの……」

主人は咄け乍ら自分の家へ入つて行きました。悪太郎は又た此の主人の言ふ事に少しく感心しました。けれども矢張り、「あの主人は無學なんだから、ああ云ふのだらう？」と思ひました。

悪太郎はまた次の村へ入りました。そして繁つた森の中を通つてゐますと、大きな樹の下で、破れた着物を着た男が、思案に餘つたやうに、腕を組んで泣き乍ら坐つてゐました。悪太郎は恐るゝ其の側へ行つて、

「もし、あなたは何うなさいましたのですか。どこかお悪いのですか。」と尋ねました。すると其の男は、

「もうし、旅のお方、どうか私を助けて下さい、私は此れから都へ行くのですが、こんな深い森の中へ迷ひ込んで、どうしても町へ出る事が出来ないうで、もう三日三晩食はず飲まずに迷ひました。どうぞ私を此の森の中から助け出して下さい。」と言ひました。

「さうですか、それはお氣の儘です。私は都の遠くの番で、丁度これから其處へ歸らうと思つて居る所です。では、今から御一緒致しませう。此所に私のお辨當があります。さアこれをお食ひなさい。今其所の溪から水を汲んで来てあげますから。」

悪太郎は此時産れて始めて他人に親切を盡したのでした。かうして其の旅人を介抱してあげてゐるうちに、不圖想ひ出したやうに、

「時に、あなたのお名前は？」と訊きますと、旅人は、恥かしさうに、

「私の名前は森中道太郎と申します。」と申しました。

「まア森中道太郎さんが、森の中で道に迷つたのですか。」

「はい、左様でございます。して、あなたのお名前は何と申しますか。」

「私は國中悪太郎と申します。」

「まア、どうして、あなたの様な御親切なお方は、此の國中での最も善いお方です。國中善太郎様です。」

其時悪太郎は思はずこんな事を申しました。

のですか。」

「あなたは馬鹿ですネ。お樂だつてお福だつて心の曲つた奴は曲つてるんです、名前なんて、人間の符牒だもの……」

主人は咄け乍ら自分の家へ入つて行きました。悪太郎は又た此の主人の言ふ事に少しく感心しました。けれども矢張り、「あの主人は無學なんだから、ああ云ふのだらう？」と思ひました。

悪太郎はまた次の村へ入りました。そして繁つた森の中を通つてゐますと、大きな樹の下で、破れた着物を着た男が、思案に餘つたやうに、腕を組んで泣き乍ら坐つてゐました。悪太郎は恐るゝ其の側へ行つて、

「もし、あなたは何うなさいましたのですか。どこかお悪いのですか。」と尋ねました。すると其の男は、

「もうし、旅のお方、どうか私を助けて下さい、私は此れから都へ行くのですが、こんな深い森の中へ迷ひ込んで、どうしても町へ出る事が出来ないうで、もう三日三晩食はず飲まずに迷ひました。どうぞ私を此の森の中から助け出して下さい。」と言ひました。

「まアに、名前なんて、人間の符牒ですもの、森中道太郎さんでも森の中に迷ふ事もあり、森中迷太郎でも、迷はない事があるでせう。私の名前は悪太郎でも、私の心は善太郎ですよ。」

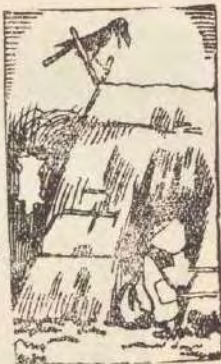
「あア、さうです、名前なんか、どうでも宜いのです。」と旅人も申しました。

それから二人は、森の中を出て町へ行きました。悪太郎は其所で其の森中道太郎と別れて、自分の村へ歸つて早速校長様の所へ行きました。

校長様は大變善人らしく、優しさうになつた悪太郎の顔を見て、

「あなたは、自分で苦勞して、自分で眞理を發見して歸つた。あなたはあたらしい名を見付けないで、あたらしい眞理を見付けた。人間には、善い名前だとか立派な着物だとかいふものよりも善い心、立派な精神が第一です。あなたには今それがハッキリと解つたのだ。悪太郎さん、お目出度うございませう。」

と申しました。



哀れな鴉の話

伊藤 温子

或夕方、鴉が水田の上に飛んでゐますと、一人の年老いた乞食がそこにたゞずんで申しました。

「あゝあの鴉たちは昔なお腹がーばいなのだ。そして昔な親子そろろてゐるのだ。おまけに、暖い寝床もあるだらうに。」
暫くしますと、鴉たちは昔な森に歸つて行きました。そして、寒い寒い風が吹いて来ました。

乞食は三日ばかり何も食べませんでした。そのやせたる顔には、おぼしめしなく、
「あゝ、鳥でもよいから乞食なんかしたくはない。」と、神樂にいのりました。

其晩乞食は泣き泣き死んでしまひました。そして哀れな乞食は、一羽の黒い鴉に生れ更りました。

鳥になると、口は利けない代りに、乞食であつた事や、土手の乞食小屋まで忘れませんでした。

乞食の鴉は鳥に生れ更つても大變不幸でした。鳥の仲間には、獨り法師の鳥が深山にゐました。生れてから親鴉の聲も聞いた事のない鴉や、羽がない爲に飛べなくなつて河原に落ちて死んだ鴉や、行方の知れずになつた鴉もありました。

乞食の鴉は生れた時から親を知りませんでした。で、親切な老いた三羽の鴉に育てられました。そして、漸く一人して食物を探しに行かれる頃、親切だつた老いた鴉は二羽共死んでしまひました。その死に際と言つた一言が



唐櫃の魔物

(推定童話)

寺島 酉男

ある村から遠くない山の麓に古いお寺がありました。和尚さんと和尚さんの首姫のお文と寺男と、それから小坊主の虎市の四人暮ししてゐました。

このお寺は別に名があるのですが、村人で本當の名を知るものは少くなく、大低は大蛇寺と呼んで居ります。これはお寺の後に大蛇ヶ池といふ池があつて何時の頃か大蛇が棲んでゐて、年々いろいろな害をしたので、今から丁度百年ばかり前に、このお寺に大僧えらい和尚さんが、三日三晩、祈り續けてたうとお経の力で大蛇を捕まへた。蛇は縛り縛りしてしまつたので、その後には蛇もなくなり、魔物かになつたといふ傳説があるからです。

大蛇ヶ池はそれ程廣くはありませんが、深さはどの位か測れない程で、岸には名の知れない水草が生ひ茂つて、水の色も青黒く、見るから物懐い池です。

小坊主の虎市は、もとの村の大百姓の一人息子でしたが、あまり可愛がられたためか、まるで鼠の生れ代りの様に悪戯が好きで、おまけに我儘な子でありました。今年十二になりましたが、あまり亂暴が募るので、親も困つて、たうとう此のお寺に小坊主に遣られたのでした。ところがそれと反對に和尚さんの貴ひ姫のお文は心がけが優しい伶俐な子でした。二人は不思議に仲が良くして始終一緒に遊んでゐました。

さて、お寺に来て虎市の亂暴は止みませんでした。和尚さんの大事な植木を折る位はいふ方で、罪のない猫を縛つて木に吊したり、鼠を捕へて油をかけて火をつけたりしたので、流石の和尚さんも見兼ねて時々折檻をしましたが、虎市には少しもきゝめがありませんでした。

暑い夏の日のこと、和尚さんが隣村まで行く用事が出来たので虎市を呼んで「わしは今から隣村へ行くが、お前は後で書齋を片附て置いてくれ、夕方は歸るから。」と云つて、出掛ようとなりました。その時和尚さんは不圖氣がついたやうに「それから書齋の押入に置いてある唐櫃は決して手をつけてはいけませんよ」と常とは似もつかず大層威そかに申渡して、心を残す様にして、出て行きました。

胸から離れませんでした。

「出来るなら、神様が許して下るなら、乞食でもいい人間になりたい。」と云ふのでした。

「乞食だった私は、私は乞食の人間だった。」と云はうとしましたが、鳥の仲間では自分が知つてゐても、それを云ふと、一生懸命になつてしまふのでしたから黙つてゐました。鴉は本當に悲しい事だと思ひました。出来るなら乞食にでもよいかから人間に生れ更つて呉れるとよいと念ひました。二羽の鴉は、大變に好い鴉でしたから、必らず神様の御恩で人間になるであらうと思ひました。

或秋の朝でした。仲間の鴉と一緒に寂れな鴉も餌を探しに出かけました。で、方々飛んでゐるうち、たつた一羽になりました。鴉は忘れる事の出ない乞食小屋のある土手の草の中に下りました。土手の下には水の枯れた河が白く普通通り流れて、赤い水藪や葎が生えてゐました。そして、小さい河原には石で圍んだ箱があつて、木の枝を三本組み合せた真中の

暫くすると、見覚えのある安吉と云ふ乞食が出て来て、鍋の蓋を取らうとしました。鴉はなつかしさのあまりに傍に飛んで行つて、「安吉、安吉しばらくたつたね。」と言ひました。するとどうでせう。昔あんなに仲良かった安吉は、河原の小石を取るなり、鴉を目かけて投げつけ、

「泥棒鴉、早く行け。」と叫びました。鴉は悲しさのあまり今度は小屋の上にとま

「定三、定三、廣二、爲二郎。」と知つてゐる乞食の名を皆な呼びました。すると中からは皆な出て来て、小石を投げながら「少し間がよくて食物のある朝を繰起でもない。」といひました。鴉は成程自分の喰くのは良くなかつたと氣がついて土手を真すぐに町の方へ飛んで行きました。けれど誰一人普通通りに「忠八。」と云つて呼んでくれなかつた事が悲しくなりませんでした。あんなに食物があるなら、乞食でもよかつたと思ひました。町の空には、知らぬ鴉も飛んでゐました。

虎市はお文と一しよにお午御飯を喰べて、書齋へ行き、言ひつけられた通り本を片づけ始めました。響きは又強くなりました。大蛇ヶ池の邊りでは蛙がしきりとガーガー鳴いてゐます。虎市は本を片づけ終つて、自分の室へ歸らうとしてふと押入を見ますと、古びてはゐますが立派な箱があります。

「これだな」と、虎市はや、暫く眺めてゐましたが、持つて生れた悪戯心が出て来て、ソツと、觸つて見ようかと傍へ寄りましたが、和尚さんの言葉が流石に氣になつて、暫く迷つてゐました。と丁度その時、お文が何氣なく来て、この様子を見て、

「虎市さん、何をしてゐるの。その箱に觸つては大變よ。早く向へ行きませう。」と無理に虎市の手を取つて庫裡の方へ連れて行つてしまひました。

虎市はもう一度よく見たいものと思ひましたので、や、半時も経つて、お文のゐないのを見てまた獨りで書齋へ這入りました。押入を開けて例の唐櫃をちつと見てゐると、だんだん和尚さんの言葉を忘れてしまつて、又お文が來ない内にと

思つて、ソツと箱の前側へ手を當て、見ますと、不思議にも「バラリ」と音がして、前の板が落ちました。

「アッ」と云つて虎市がもとの形に直さうとすると、その機會に残りの三方の板まで皆剥れて落ちてしまひました。すると中にもう一つ箱があります。これは白木の綺麗な箱で、紫色の絹織で十文字に結んで、封印がしてあります。



虎市は初め箱を開ける氣は無かつたのですが、どうせこはれたのだから構ふものか、明けて中を見てやれやれといふ氣になつて、目ごころの輝が出て大庭に封印を切つて、箱の中を覗いて見ました。すると、

い紐で結んで封印がしてあります。

この時、何處からともなく「明けるな、和尚さんの言葉を守れ。」と云ふ聲が聞えました。と、箱の中からも「早く開けて見ろ、面白いものが出るぞ。」と云ふ聲がしました。暫く二つの聲はお互ひに争つてゐるやうに聞えましたが、間もなく箱の中の聲だけしか聞こえなくなりました。虎市はモロ猶豫しません。突如赤い封印を破つて蓋をハネると、金色の光が燦然として目を射ました。

「金の盞だ！」虎市は日頃聞いてゐる傳説の事を思ひ出し、慄然として思はず前にのめりました。と、この時恐ろしい大音響がして、金の盞の蓋が飛び上つたかと思ふと、見る／＼天地が暗くなつて大雨が篠衝く様に降つて来ておそろしい雷鳴がとどろきました。虎市は生きた心地もなくふるへてゐました。程なく雨も雷鳴もバツタリ止んだと思ふと、虎市の前に青い着物を着た怪しい魔物がスツク

煙突からは普通通りに黒い煙が吐かれて、橋の上には陣や馬車が通つてゐました。鴉は乞食だつた時よく貰ひに行つた内儀さんの家の厨所の上で悲しそうに、

「内儀さん。私です。忠八乞食ですよ。と啼きました。すると、中から内儀さんが出て来て、

「厭な鴉ね、家の煙は今晚赤ン坊を生むのに早く行け。」と言ひました。

「カアカア、おや、娘さんはさぞよいお新さんとりましたでせう。親孝行な美しい娘さんでしたからね。」

「うるさい鴉ね。娘が氣を悪くするよ。」と云つて内儀さんは叱々と云ひました。鴉は氣が附いて啼き／＼森へ降りました。

其次の朝、鴉がまた内儀さんの所に行つて黙つて屋根に止まつてゐると、隣の障子かゝに照つてゐる井戸端で、内儀さんとお隣のお婆さんが話してゐました。

「娘は双子を生かしましたよ。」
「お婆さん、さういふすれ。可愛い鈴子ちゃん

でせうね、坊ちゃん？ 雛ちゃん？」
「はい、男の子でしたよ。」

鴉は窓からそつと部屋をのぞくと、可愛い赤ン坊が二人、赤い布圍に寝てゐました。鴉は森に歸つて、このはなしを生き残つてゐる一羽の親切な鴉にしますと、目をしばたいて、

「必らず二羽の鴉だつたよ。あの鴉は本當に親切な鴉だつた。實は自分はやはり、次の世には乞食にでも思つてゐるが、本當はこの前の世には乞食だつたのさ。あゝやはり人間の方がよい。」と云ふなり鴉は、暗になつてしまひました。それを見た哀れな鴉は、悲しく啼きながら乞食小屋のある土手へ飛んで来て、

「皆さん逆者にお暮しなさい。」と啼くなり、河に渡つて死んでしまひました。

死になつた鴉と死んだ鴉が、また人間になつたかどうか誰も知りません。

(なほり)

と立ちました。

俺は大蛇ヶ池の主だ。長い間蓋の中に押籠められて居たが、お前のお蔭で又世に出た。このお蔭に何でもお前の願事があれば聞いてやるが、願事がなくなればその時お前の命はないから、さう思へ。」と云ひました。

虎市は恐ろしいながらも不思議な喜びを感じて、直ぐと「大きな御殿を建て臣下を百人許りこしらへてくれ。」と云ひました。

「よろしい。」と云ふ聲がしたかと思ふと、今迄の汚ないお寺が見る間に美しい御殿になつて、大勢の臣下が虎市の前に平伏しました。虎市の満足はたとへやうもありませんでした。しかし考へるといくら御殿が廣く、臣下が大勢でもお金がなくなつては不自由だと思ひました。

次の日も、同じ刻限になると青い着物の魔物がきたので、
「お金がいくらでも出る井戸が欲しい。」と云ひました。すると、其言葉が終らないうちに、庭先に綺麗な石の井戸が出来て、金銀のお金が湧き出して居ます。

「世の中に得られないものは無い。」と思つた虎市は得意の絶頂になりました。しかし明日迄に次の願事を考へて置かないと自分の命はなくなるのだと思ふと、よろこびもなにもなくなつて、急におそろしくなりました。

早やくも次の日となると、時刻をたがへず魔物は出て来ました。
虎市は今度は「馬に乗つて天を飛んで見たい。」と云ふと、魔物は直ぐ一羽の鷲となつて、虎市を乗せて大空高く舞ひ上りました。野も山も川も村も村も目の下になつたので、虎市は面白くつたりませんでした。暫く我を忘れて居ました。

また次の日が来ました。虎市は生かされた心算もありません。身には命を懸つて居たらしい舞殿に、澤山の目下に傳はれてゐますが、今は少しも悲しくはありませんで、した。もとの小坊主の時が戀しくなりました。今日こそは何も云はずに居るよ。魔物の餌食になつてしまはうと決心しましたが、流石に悲しくなつて思はず涙に暮れて居ました。と何時の間にか仲よしのお文が傍に来てゐるいつものやうに優しい聲で、

「虎市さん、今となつて始めて後悔したのでせう。私が助けて上ますから心配してはいけません。」と云つてくれました。しかし、虎市は別に氣にも止めないで、茫然してゐると、例の刻限になつたので、魔物が出て来て荒々しい聲で、

「モウ願事はないのか。それなら約束の通りお前を喰ふからさう思へ。」と云ひました。此時虎市の傍にゐたお文は其處にあつた磁瓶と茶碗を取つて大蛇に向つて「まだ願事は有ります。この水を茶碗の縁から一寸だけ高くなる様に注いで下さい。」と申しました。

すると魔物はすぐ磁瓶から水を注ぎ始めました。しかし、いくら骨を折つても、水は茶碗の縁から一寸は愚か、五分と高く注ぐ事は出来ません。流石に不思議な力を持つた大蛇も敵はないと思つたのでせう、突如虎市を目がけて磁瓶を投げつけるが早いか、恐ろしい音をさして姿を消してしまひました。

虎市は驚いて、一聲「キヤツ！」と叫んで氣絶してしまひました。

「虎市さん、虎市さん。」とお文に呼ばれてはじめて我にかへつた時には虎市は、和尙さんの書齋の唐櫃の前に倒れてゐました。それから、虎市は生れかへつたやうに溫和しい子になつたといふ事です。(なほり)



(語國傳説童話)

蚊柱と数奇な少年との話

藤澤衛彦

昔、或る村の農夫が、すぐ向側の鍛冶屋さんに用があつて、

「鍛冶屋さ——ん」と聲をかけましたが、折から、トンチンカンチンやつてをりました鍛冶屋さんには、街路の向から農夫の呼聲が耳に入りませんでしたので、相變らず、知らん顔をして、トンチンカンチンやつてをりました。それを見て、農夫は、「つえッ。」と舌打して、今度は、大聲に、

「かぢやア——。」と、どなりました。それを聞きつけて、鍛冶屋さんはびつくりし、

「なに火事やア——？」と叫び出しました。とたんに鍛冶屋さんはまた、眞正に燃けてゐた鐵の棒を、何思つたか、シューと水の中に突込みました。と、水の中からは、滾々と煙があがりました。

丁度その時、この家の前を通りかゝつた旅人が、「火事やア——」の聲に驚いて駆けつけますと、鍛冶屋さんの仕事場には、シューと滾る煙の中に、燐の火がヒカヒカと見え



きました。

仕事場の鍛冶屋さんも、むろん、「火事やア——。」と、どなりながら表に飛出しました。

向側の農夫も、それを眞實だと思つて、「火事やア——、火事やア——。」と眞剣になつて叫び廻りました。

その報知は、忽ちの間に、甲から乙へ、乙から丙へと傳はりました。村の鐘撞掛は、夢中になつて物見梯子にかけ登り、ザン／＼、ザン／＼と、めつたやたらに鐘撞を亂打しました。村中の消防夫が集つて、「火事は何處だア。」と怒鳴つてゐるのに消く気がついた鐘撞掛が、ぼつとして四方に眼をくばりますと、遙かあな桑野山の方向にあつた、漆々たる一條の黒煙が見えましたので

「火事は桑野村ア——。」と叫れ出しました。それ行け、急げと、一夥りに走るわ、走るわ、しまひにはまた、志太前中の消防夫が一連になつて、やがて天の一方に渦きのぼる黒煙なめがけて駆けつけますと、間もなく大井川の上流に出ました。と見ると、不思議や

その黒煙は、その黒煙が流る甲から立井掛つてゐるのでございしました。何の事かと、近寄つて見ますと、それは、兼敵もなく深山の敵軍が、アアンと入り亂れ舞ひのぼる、世にいふ蚊柱の大きなものであつたのであります。

で、流石の消防夫連も、暫くは開いた口が閉がらず、この珍らしい奇現象に呆然としてをりましたが、気がついて見ますと、これは又一層の不思議、昨日まで酒々と流れてをつた管の河水が、今日に限つて一滴もないといふ有様なので、皆は大驚きをいたしました。

「一體どうしたんだ。」

「河の水が蚊に化つたのでもあるまい。」

「それとも誰か流を堰止めてゐるのかな。」

「馬鹿な、そんな事が出来る筈がない。」

「とにかく、もつと上つて見ろ。」といふので谷みんなして水上を探つてみますと、桑野山の麓に大蛇が産して、今しもその身を水上に横へたる最中ございしました。水はその流に堰止められて逆流し、満々たる水が

そこら野の谷間に漲つてをる状態です。何にせ、あの大蛇が退いたら危險だ、その水は一度に我々の方に来ると、心配してゐた時、——人々の眼に映りましたのは、悪く浪に押流されて、助けを呼んでゐる山谷の少年の群でした。しかし、それを助ける事は誰にだつて出来る處でありません。たゞ「あれよ、あれよ」といふうちに、少年達は一人一人渦巻く水に吞まれて行つて、今はたつた一人ぎりになりましたが、その最後をい極めるところか、もはや皆々危険だといふので、われ先に逃げ歸つてしまひました。

翌日、大井川の流が、およそ元の通りになつたやうですので、村人が、桑野山にやつて来て見ますと、大蛇も蚊柱も見えず、唯激流の谷に山崩れがあつたと見えて、山の形が大部に崩り、その中腹の崖から突き出た大木の梢に捉つて、昨日の少年が危く助つてをりましたので、何處の子だらうと、

「おまへは誰だア——。」と尋ねましたら、

「かぢやア——。」と其子が答へましたとき。

(蚊河の語)

對話
お母さんのお留守

中島孤島



(登場人物)

お母さん。
文雄。
百合子。

〔お母さんは今お座敷でお出掛けの支度をしながら、文雄と百合子に話しかけておます〕
お母さん。母さんはちよいとご用に行つて来るからね、おとなしくお留守番をして
ゐるんですよ。だだをこねて、姉やに世話をやかせてはいけませんよ。

百合子。あら！ お母さん、何處へいらつしやるの？

お母さん。ちよいと午込の小母さんのとこまで行くんだからね、すぐ歸りますよ。

文雄。母さん、僕がちやんとお留守番してゐるから大丈夫ですよ。

お母さん。だがね、文雄さんは、母さんの留守に何をして遊ぶつもり？

文雄。僕はいろんなことをして遊んでゐます。

お母さん。いろんなこと？ まあどんなことなの？

文雄。それはいろんなことなの。金の船を讀んだり、ポンチを見たり、それ
からね……それからね……

お母さん。ちやア自分のお部屋へ行つてらつしやいな。

文雄。部屋なんか！ 赤坊のやうでいけないや！ 母さん
と父さんのやうにこゝにゐる方がいい。

お母さん。父さんと母さんならこゝにゐたつて悪戯はしません

文雄。僕だつてしないや！ 母さんが悪いつてことは、僕
はきつとしない。僕は世界一の子供になるんだから。

お母さん。さう、ちやア文雄さんは蒲團の引張りッこなんかし
ないでせうね？

文雄。僕はしません。

百合子。(文雄の方を覗くやうにして) まさかねー

お母さん。百合子さんは母さんの編物なんぞおもちやにしない
でせうね！

百合子。え、しないわ！

お母さん。それから二人ともこゝにある箱へ手をつけちやアい
けませんよ。

文雄。(お母さんの顔を見上げて) 何故？

お母さん。(笑ひながら) 何故でも！

百合子。お母さん！ あたし言つて見ませうか？——きつと
大切なものが入つてるのよ！

お母さん。(笑ひながら首をかく／＼させて見せて) あゝさうだよ
——ちやア今言つたことを忘れちやアいけませんよ、それ

から聲やに世話をやかさないやうにするんですよ。

文雄。え、大丈夫ですよ——母さん、行つてらつしや
いな！

お母さん。ちやア行つて來ますよ。

(お母さんは襖をあけて、出て行きます)

百合子。(文雄の方を見て) 兄さん！ お母さんの行くのを窓
から見てゐませう。

(二人は立つ窓のこゝろへ行つて、硝子越しに外を眺めてゐる)

文雄。とう／＼行つちやつた！ (と言ひながらまた元のと
こゝへ来て坐る) 百合ちゃん！ 何して遊ぼう？

百合子。(文雄のそばへ来て) こゝちやア遊ぶことがないわ！
お部屋へ行きますよ、兄さん！

文雄。赤坊のやうでいけないや——お前は赤坊だなア！

僕はこゝにゐて父さんや母さんのまねをして遊ぶんだ。

百合子。えい／＼ちやアあたしはお仕事をやるから、兄さん
はお父さんのやうに新聞をお読みなさいよ。

文雄。よし／＼(と言ひながら蒲團の上へあぐらをかいて、新
聞をひねくつてゐます)

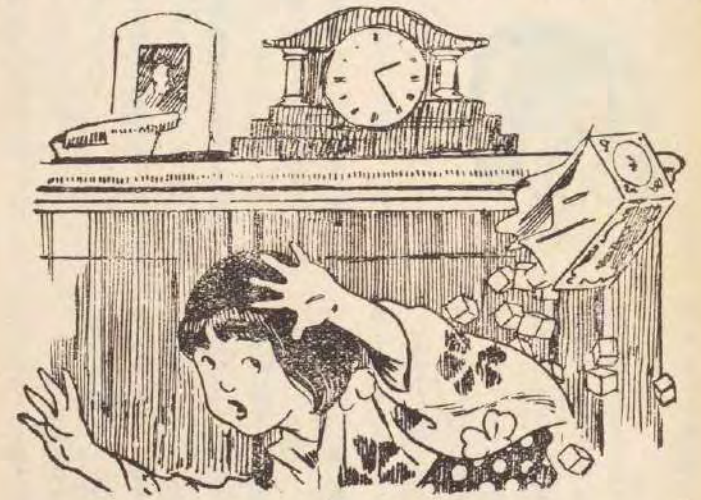
百合子。(窓の中を見張しながら) あたしは何をしたらいゝんだ
らう？ 編物をいぢると吐かれるし……

文雄。かまやしない！ 糸をはごさないやうにして置けば

分りやしないよ。
百合子だつて悪いわ！（お母さんの針箱をあけて、こわくわく物のやりかけを引出して見て）まアきれいだ！（と、いひながら針を抜く）
文 雄。さア、父さんのやうに讀むから聞いといでよ。（と新聞を手につけて）一え、イギリスの王様が、公園へ行つて、犬に咬つかれたら、兵隊が行つて、王様を助けました……それから……え、それから……！
百合子（針と毛糸の球を四方の手に持ちながら文雄の方を見て）兄さん！ それからどうしたの？
文 雄。それから……何だか分らない字があるから、字



八〇
（文雄は針箱へのつて、束縛の書物を下さうとする拍子に、書物の重みで一しよに轉び落ちて、書物の上へはふり出す。）
百合子。おほ、（と轉がつて笑ひながら）あ、おかしい！ おほ、ムムム、文 雄。（起きあがりながら）何だい！ひとが痛いのを、笑ふなんて、何だい！（といきなり指圖を持つて打つてかかる）
百合子。あら！ ひどいわ！ 打たないだつてい、ちやなくつて！（と跳上つて逃げる拍子に、膝の上の鉢巻が飛び散る。）
（文雄は新聞を振上げて、妹の百合子を座敷中追廻してゐましたが、そのうちに振廻した蒲團が簀笥へさばつて、さつきお母さんから「手をつけやいけない」と言はれた箱が落ちて来た。その拍子に箱の蓋があいて中から角砂糖が蓋の上へこぼれ出した。）



かつたら、假でもやらア。
百合子。（文雄が詰めた砂糖を箱の中へ入れるのを見て）あら兄さん！ 詰めたのを入れちゃア、きたないぢやないの！
文 雄。さうだなア！ ぢやア詰めた奴はまへちまほう、ね、その方がいいや！
百合子。だつてもう混つちやつて分りやしないわ！（と箱の中をかき廻しながら）どれだつたか分りやしない！
文 雄。馬鹿だなア！ それぢやアみんな食べなくつちやア駄目だ！
百合子。それがい、や！
（こゝへお母さんが歸つて来て、二人してせつせと角砂糖を食べてゐるのを見て）お母さん。（座敷の入口へ立ちながら）まア何をしてゐるの？ 文雄さん！ 百合ちゃん！ まアお前達は何をしておいでだつたえ？

百合子。(お母さんの方を見て)何もしやしないの！ おとなしく遊んでみたのよ！

文。俺だつて悪戯なんぞしやしない！

お母さん。さうでせう！ 母さんが針箱や蒲團をおもちやにしたり、その箱へ手をつけちやいけないつて、あれほど言つて置いたのですからね！ 針箱が轉がつてゐたり 蒲團が飛んでゐたり、書物が散らかつてゐたり、手をつけるんぢやないつて言つてつた箱の蓋があいてゐたりするんですものね！ それでも悪戯はしなかつたのね！(へと言つ、お母さんは座敷の中へ入つて来る)

文。母さん！ だつて本

常に悪戯をするつもりぢやアなかつたんです。たゞ、母さんと父さんのまねをして遊んでゐたんです。僕は百合ちゃんに新聞を読んで聞かせてゐたんだ、ねえ、百合ちゃん！



お母さん(そこへ進つて角砂糖を眺めながら)このお砂糖はね二人にあげようと思つてしまつて置いたのですが、それぢやアきたないから、みんな捨てちまひませうね。

文。みんな捨てちまふの！母さん、惜しいなア！

お母さん。あたしはお前達がおとなしくして待つてゐなかつた方が、よつほど惜しい！ この次から、母さんの留守に、こゝで遊ぶことはなりませんよ。さア自分の部屋へ行つてゐらつしやい！

百合子。(立ち上つて文雄を見作り)兄さんがわるいんだわ！

文。誰。百合ちゃんか笑ふからわるいんだ！

お母さん。(も立ち上つて)そんなことを言つてゐないで、二人とも早く部屋へおいでなさい！

(二人はお母さんに叱られて、しばらくと座敷から出て行く。)

——(幕)——

百合子。(きまり悪るまうに、下を向きながら)あたしはお母さんのやうにお仕事をしてゐたばかりなの！

お母さん。(驚いて)まアお仕事を！

文。誰。それから字が分らなかつたから、字引を引かうと思つたら、あんまり重くつて轉んぢやつたんです。さうしたら百合ちゃんか笑ふんだもの！

百合子。あたしが笑つたつて、兄さんは蒲團 打つんでもの！

文。誰だつて僕の痛いのを面白さうに笑ふんだよ！

百合子。それからあたしが逃げる拍子に、糸巻が落つたの！兄さんが蒲團を振廻したもんだから、箱が落つたんだわ！

文。誰だつて、僕は落とすつもりぢやアなかつたんです。ひとりでに落つて来たんです。

お母さん。ちやア、角砂糖がどうして口へ入つたんでせう？ それも大方ひとりでに入つたんでせうね？

文。誰。うゝん、だつて甜めたのを入れといちやまたないんですもの！

百合子。(お砂糖が何か分らなかつたから、甜めて見たの！)

墓守の鬼と少年

むかし、支那の國にそれは、親孝行な二人の兄弟がありました。ふとした病から一人の父親に別れてから、二人はもう氣のちがふほど悲しんで、明けてもくれても、墓のまはりて泣いてゐました。けれども、いつまでさうしてゐては、家業がすたつてしまつて、つまりは父にも不孝だと思ひ返したものですから、兄の方は或日お墓の後に「忘れ草」を植ゑて、長い間の悲みをふつつりと忘れてしまひ、あくる日からお役所につとめて毎日の仕事に精を出しました。けれども、弟は大へん兄の爲方を薄情だと總んで、自分ば兄とは反對に長く忘れな心のあるしにされてゐた。紫苑の花をお墓の傍に植ゑて、自分はいつまでも父の情を忘れまいと堅く誓ひました。すると、或日、いつもの通りお墓へ行つて泣いてゐますとお墓の中から聲が聞えて、

『わしはこの墓を守る鬼だが、神さまがお前のやさしい心を可哀さうに思召して、わしに命じてお前の一生の福をお守らせになつた。この後は毎夜の夢に現れて、明日の日のことを前以てお前に教へてやるよ。』と、いひました。

その靈験があつたのでせうか、それからこの、弟は未來の事のよくわかる國中第一の賢人になつて、幸願に世の中を遊つたさうです。



曙の國（日本神話）

楠山 正雄

一、八千矛の神

さて夜の國からおかへりになつた大國主命は、ひいおぢいさまの素盞雄命の言お仕ひになつた出雲の國に御殿を建てて、日本の國を治めてお出でになりましたが、その時分はま

氣味のわるい笑ひ聲を立てたり、踊りくるつてをりました。でもかういふ中にも、どこかそこいらがうつすりと明るいやうな、今にも朝日の光がばつと勢よく射して來さうな、それでゐていつまでも薄ぐらいいは、夜の明方のやうなのが、その時分の日本の國の有様でした。

大國主命は素盞雄命のお志を繼いで、一日も早くこのみだれた日本の國を治めたいとお思ひになりました。そこで八千矛といつて大きな矛をおつきになつて、毎日毎日けはしい山坂をかけ下りかけ上り、道のない谷川を傳ひ歩いて、日本の國中をお歩きになりました。そして人を苦しめる怪物を退治したり、悪魔を亡はしたり、物を食べることも、夜寝ることともわすれて、仕事に精をお出しになりました。みんなは命を八千矛の神と呼んで畏れてをりました。

二、小さい神

かうして大國主命は、相變らず國々をめくり、歩いておいでになりましたが、或朝命は出雲の國の美保の崎といふ所へお出になりました。まだ日の出ない前て海の上は朝霧が深くこめてるましたが、觀の中からかすかに歌をうたふ聲がし

だ天と地とが二つに分かれて、日本の國のかたちがやつとついたまゝ、何百年といふ間も、國を治める人もなく、捨ててあつたものですから、出雲の國のほかは日本中どこもまるで開けたところはありませぬ。山は森のやうな大きな樹が伸びはうだい、野は木のやうな茅薈が茂りはうだい、岩の隙には鶴のやうな氣味のわるい大鳥が住み、淵の中には八岐の大蛇のやうな恐ろしい怪物のゐるともめづらしいことではありませぬ。天と地と分かれたといつても、まだ何となくはつきりとしないうやうな、空はどんよりと、いつも雲や霧が深く日の光も思ひ切つてはさゝないやうですし、それに地もまだほんたうには固まらないものですから、そこらが何となく水づいて、じめじめした澤や池に水草や藻の花がうぢやうく咲いてゐました。

夜になると、沼のやうな中から怪しい光りものがしたり、燒石のやうに固まつた土の上から火がもえ出したりしました。そのくらい中から幾千萬とない悪魔が蟲のやうに湧き出して、夜も驚も、おんはの啼くやうな聲を出して吠えたり、

ました。どうしたのかと思つて見ていらつしやいますと、海の上にだん／＼明るい光がさして來ました。そして火とり蟲の皮を剥いで作つた着物を着た小さな神さまが、お芋の葉でこしらへたかはらしい舟にのつて流れて來ました。あんまり小さい、可愛らしい神さまなので、大國主命はつい手をのばして、舟ごと波の上からお拾ひ上げになりました。そして手のひらにのせて御覽になりますと、立派に目鼻がついてちやんと人間の形をしてゐるので、おもしろがつて鼻をつまんだり、頭をたゞいたり、腰をつかんでぶらさけて見たりなさいますと、その小さな神さまは大へんおこつて、いきなりとび上つて、大國主命の頬べたにひどく噛みつきました。命はびつくりして、

「あなたは一體どなたです。」とお聞きになりますと、小さい神さまはぶん／＼おこつてゐて返事もなさいませぬ。命もお困りになつて、お供の神たちにおたづねになりましたが、誰も知つてゐるものがありません。そこらの草や木や石や、木の上にとまつてゐる鳥や、草の上をはつてゐる蟲にまでおたづねになりましたが、誰も知つてゐるものがありません。

「なるほどあれはわしの子どもにちがひないが、小さいくせにあんまりいたづらなので、わたしの手のひらの上でふざけてゐて、かけまはる拍子に指の誤からほろりとこぼれて、下界へ落ちてしまつた。これからは大國主命と兄弟になつて、日本の國を治めるがよい。」と仰しやいました。



大國主命は大そうお喜びになつて神産靈の神のお言葉のとほり少彦名命と御兄弟のお約束をなさいました。少彦名命は體こそ小さな神様でしたがそれは實に神様で、大國主命をたすけて世の御中の人たちに、氣を伸つて國を治ることだ

せん。その時敷の中からのそ〜と一匹の蟻蛙がはひ出して来て、「それは案山子の久延彦が存じてゐる筈でございます。」と申しました。



「ないといふことのない神です。」

その時久延彦は、おたづねに答へて、

「それは神産靈の神のお子さまで、少彦名の命といふ方です。」といひました。

そこで早速高天原へお使を立てて、どういふわけで少彦名命が伊弉へお降りになつたのですかと仰つて、おうかがひし

の、樂をのんで病氣をなほすことだの、いろ〜といひことをおかんがへになりました。みんなはよく二人の神様の徳になつて、國中がよく治まりました。

三、賭

また大國主命は少彦名命とお二人で澤山の薔や蹴をお作りになり、土地を開いて畑を耕すことをおはじめになりました。土がまだほんたうにかたまらずに、ぶく〜沼のやうになつてゐる所は、岩や砂を運んで踏みかため、水が四方に流れ出して湖水のやうになつてゐる所には、川を切り開いて水を流し、水づいて澤のやうになつてゐる所には、葦や菅のやうな水草を植えました。

その中こゝにもかしこにも葦や葎が茂つてそよ風に吹かれて動くので、日本の國を葦原の中つ國といふやうになりました。

或日のこと大國主命はいつものやうに少彦名命と連れ立つて、國中をめぐつてお出でになりました。あまりお天氣がよいので、二人の神様はいい心持になつて、うつら〜お眠氣になりました。すると少彦名命は、

「たゞ歩いてゐると退屈だね、何かおもしろいことをしないか。」と仰しやいました。

「あゝ、いいとも。だが何を爲るね。」と大國主命がにこにこしながらおたづねになりました。

少彦名命は少し考へていらつしやいました。

「一日重たいものをついで歩くのと、一日小用をしすがまんをするのと、どつちがらくだらう。」とおつしやいました。

「そりやあ、一日ぐる小用をこらへたつて、重たいものなんぞかつかない方がらくだね。」と大國主命が仰しやいました。

すると少彦名命は持つてお出になつた袋に、せつせと一ぱいの土をつめて、

「よし〜それで二人で賭をしよう。わたしはこの土の袋をどこまでもかついて行くが、その間あなたは小用をこらへてゐて、どちらが先に閉口するか、ためして見よう。」と仰しやつて體の十層倍もある袋を、えいやといつて肩におかつぎになりました。

大國主命は小つほけなくせに、ばかに強情な神様もあつ

たものだと、おもしろくお思ひになりながら、「よしよし。」といつて、のこ／＼後からついてお出でになりました。

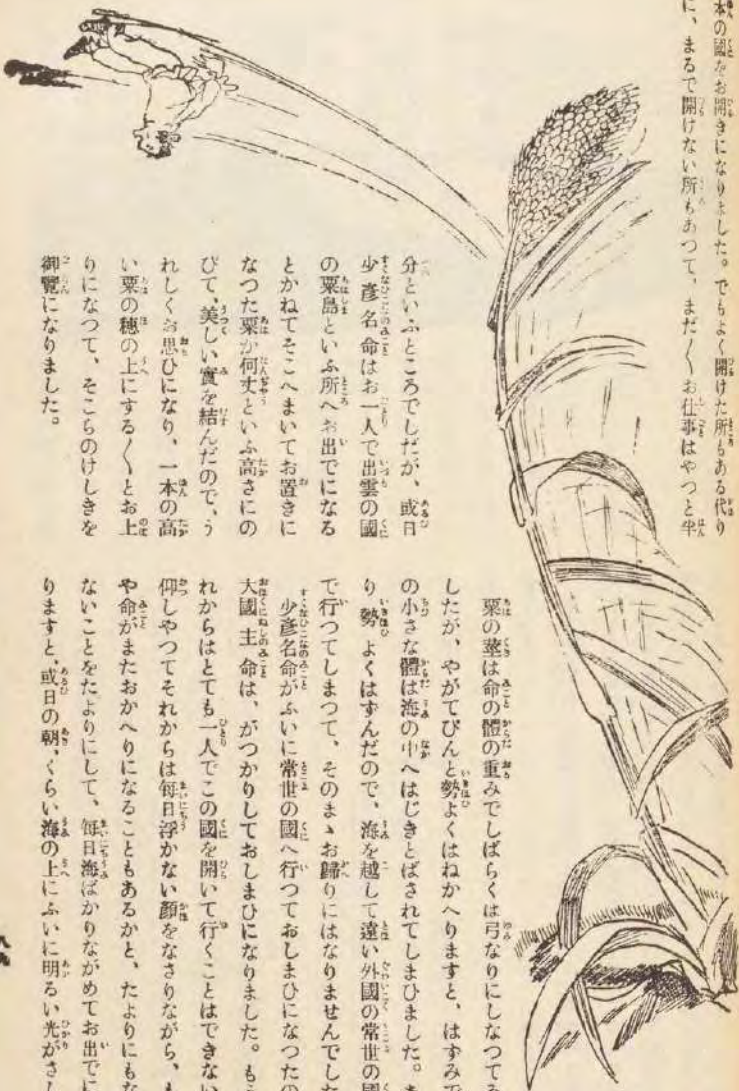
ところがもうせい／＼一町も行ったら、くたびれて閉口するだらうと思つた少彦名命は、「一町が十町になり、十町が一里になり、一里が十里になつても、いつまでも平氣な顔をして重たい袋をしようたま、すん／＼先に立つて歩いておいでになりました。そしてとう／＼出雲の國から播磨の國の神輪といふ所まで行きました。もうこゝまで来ると、大國主命は小用がしたくつてしたくつて、今にもお腹がはち切れさうになつて、いぢにもがまんにも辛抱ができないので、

「もうだめだ、賭は負けだ。」と仰しやいました。少彦名命はあつは、あつは、お腹をかへてお笑ひになつて、
「勝つた、勝つた。」と言ひながら、かついで来た土をそこにおあけになりました。

その土が小さな山になつて埴間と呼ばれることになりました。

四、粟の穂
大國主命と少彦名命とは、土地を開く金剛には、いろ／＼

本の國をお開きになりました。でもよく開けた所もある代りに、まるで開けない所もあつて、まだ／＼お仕事はやつと半



分といふところでしたが、或日少彦名命は一人で出雲の國の粟島といふ所へお出でになるとかねてそこへまいてお置きになつた粟が何丈といふ高さにのびて、美しい實を結んだので、うれしくお思ひになり、一本の高い粟の穂の上にする／＼とお上りになつて、そこらのけしきを御覽になりました。

の草木を嚼んで藥になる草をおさがしになつたり、國々に沸いてゐる温泉にお入りになつて、その利きめをおためしになつたり、鳥獸や毒蟲などの災を除けるお呪ひを發明したりして、これを人間にお教へになりましたから、この二柱の神さまは、人間の壽命を守る神さまとして、今でも尊まれてをります。

伊豫の國に道後といふむかしから名高い温泉があります。或時大國主命と少彦名命とがこゝへお出でになつた時、退屈まぎれに二人で角力をおとりになりました。

すると取り組んで轉ぶ拍子に、どこか打ちどころでもわらかつたと見えて、少彦名命は氣絶してお倒れになりました。大國主命はびつくりして近所の山の中から流れ出してゐる温泉へ命をつれて行つて、じつとお湯に體を浸けておきますと、しばらくしてふと夢からさめたやうに少彦名命は目をばつちりとおあきになつて、しやん／＼お歩き出になりました。それからこの温泉の利きめが世の中に名高くなつたのだといふことです。

粟の莖は命の體の重みでしばらくは弓なりにしなつてゐましたが、やがてびんと勢よくはねかへりますと、はすみで命の小さな體は海の中へはじきとばされてしまひました。あまり勢よくはすんだので、海を越して遠い外國の常世の國まで行つてしまつて、そのまゝお歸りにはなりませんでした。少彦名命がふいに常世の國へ行つておしまひになつたので大國主命は、がっかりしておしまひになりました。もうこれからはとても一人でこの國を開いて行くことはできないと仰しやつてそれからは毎日浮かぬ顔をなさりながら、もしや命がまたおかへりになることもあるかと、たよりにもならないことをたよりにして、毎日海ばかりながめてお出でになりますと、或日の朝、ぐらゐ海の上のふいに明るい光がさして



一人の立派な神さまが、波の穂にのつて出ておいでになりました。その時この神さまは命に向つて、「わたしをよくお祭りなさい。あなた一人の力で國を開いて行くことはできないから、わたしが力を貸して上げませう。」といひました。命はふしぎにお思ひになつて、

「あなたはどなたです。」

と、おたづねになりますと、その神さ

まは、「わたしはあなたの幸魂奇魂です。」とお答へになりました。

幸魂奇魂といふのは、人間の幸福と智慧の魂で、海をわたつて来た神さまはこの魂を守る神でした。魂を守る神さまの力が弱くなると、人間は幸福を失ひ、智慧が鈍つて、毎日ほんやり浮かない顔をして心配にばかり耽るやうになります。

そこで大國主命はこの幸魂と奇魂の神様のお言葉に従つて神様を大和の國の三諸山の上につつたので、それから元氣もつき、智慧も昔にかはらず出て、素戔雄命や神産靈の神のお言付の通り、日本の國をあらかたお切り開きになることができました。

さて大國主命は大へん子福者な神様で、八上比賣のお生みした初めの御子の木保神、須勢理比賣のお生みになつた味耜高彥根命、事代主命、甕御名方命、それから姫さんには下照媛命をはじめ、都合百八十一人の神さまがおありになり赤く日本の國の玉さまとお舞がれになりました。

神々の黄昏 (日本神話)

一、天若彦

さて日本の國では神さまの世もだん／＼おしまひになつてまゐりました。一日でいへば暮れがたの、黄昏の世に近づいてまゐりました。

大國主命の一族は、出雲の國から日本の國ちゆうにひろがつて、なかく盛んな威勢をふるつて居りましたが、何分五十年百年といふ永い年月の間に、政治がゆるんで来て、おひおひ悪い神たちが方々であばれ出し、民百姓を苦めたりするので、日本の國もだん／＼亂れかけて来ました。

さて高天原では、久しい前から天照大神の思召で、日本の國はゆ／＼自分の子供たちをやつて治めさせなければならぬといふので、或時大神はお子の正勝昔勝速日天忍穂耳命をお呼びになつて、

「日本の國はわたしの子供をやつて治めさせたいと思つてゐるが、いよくその折が来たから、お前に行つてもらひたい

と思ふ。」と仰しやいました。

そこで天忍穂耳命は、仰せに従つてまつ天と地の間に架けた天の浮橋の上にお立ちになつて、下界の様子を御覽になると、豊葦原の中つ國といはれた日本の國のどこもこも何となく風立つて、鳥獸はもとより草木や巖石までも口を利いて、がや／＼ざわ／＼いつてゐます。その間には巖の間から火がもえだしたり、沼の底から光りものがしたり、悪魔の啼いたり笑つたりする聲がけた／＼ましく聞えました。

天忍穂耳命はこの様子を御覽になつて、これではせつかく天から下つても、なかく容易なことでは、治めて行くことはできないとお思ひになつて、一旦高天原にお歸りになつて、御相談をなさいました。

そこで天照大神のお思召で、天安河のひろい河原に高産靈神を議長として、八百萬の神たちの會議が開かれることになりました。

葦原の中つ國は、天照大神の御子孫のお治めになるべき國であるが、只今では悪魔のやうな國の神が國ちゆうにはびこつて、亂暴を働いてゐるので手のつけやうがない。これを平

定さるるには誰をやつたものであらう。それを相談してもらひたい。」かう高産靈神は仰しやいました。

そこで智慧者といはれてゐる思兼命をはじめ八百萬の神たちが、あれかこれかと御相談をなすつた末、

「それは天穂日命が「ぼんだ。」といふことになつて、命がお下りになることになりました。

さて天穂日命は日本の國へお下りになつて、まづ出雲の國の大國主命のお宮へお出でになりましたが、何しろ日本の王様で大そうな威勢なのにおどろいてしまつて、降参をすゝめるところか、へいへいひながら向ふの家來になつてしまひました。

天穂日命が日本の國へ下つてから三年経りましたが、うんともすんと昔沙汰なしになつてしまつたので、高天原ではまた八百萬の神たちの會議がはじまりました。

「葦原の中つ國へ天穂日命をやつたが、三年たつても歸つて來ない、此度は誰をやつたものであらう。」かう高産靈神がおたづねになりました。するとまた思兼命が、



る神殿の門口に地面の見えないほど枝葉をひろげて茂つてゐる桂の木の上に飛下りて、天照大神からお言付のとほり、
「天若彦、天若彦、お前を葦原の中つ國にやつたのは、國にはびこる悪い神たちを説いて、降参させるためではなかつたか。もうそれから八年にもなるのに、なぜ御返事をしないのだ。」といつて、やかましく啼き立てました。

するとその時、天若彦の御殿に仕へてゐる天の探女といふ召使の女が、この雉子のやかましく啼き立てる聲をきいて氣

うごきます。」と申しました。

そこで大神は天若彦を呼んで、天のはじ弓といふ弓と、天のかぐ矢といふ矢をおさづけになり、日本の國へお下しになりました。ところがこの天若彦も、出雲の國に下ると、もう高天原へかへることはわすれてしまつて、大國主命のお女の下照媛のお婿さまになり、やがては、命の後を繼いで、日本の王様に自分ならうといふ企らみをおこしました。それで高天原を出て八年めになつても、まるで昔沙汰なしになつてしまひました。

そこで高天原では、天照大神も高産靈神も御心配になり天若彦が出たつきり八年も歸つて來ないのはどうしたのであらう。此度は誰をやつて、天若彦の様子を見にやつたものであらうと八百萬の神たちや、思兼命に御相談なさいました。するとそれでは雉名鳴女をおやりになるのがよろしうございませとみんが答へました。雉名鳴女といふのは、雉の雉子のことです。

そこで雉子がお使に立つて、はる／＼日本の國へ下ることになりました。雉子は思兼の宮へ着くと、天若彦の世に味をわるがり、天若彦の前へ出て、
「門口に何だかいやな聲を出して啼く鳥がございます。氣味がわるうございますから射殺しておしまひ遊ばせ。」と申しました。天若彦は何の氣もなく、

「さうか。」といひながら、前に高天原から下るとき、天照大神のお手づから真いて來た天のはじ弓に天のかぐ矢をつがへて、たゞ一矢に雉子を射殺してしまひましたが、さすが靈驗のある矢ですから雉子の胸を射貫いた上に、すん／＼天まで高くとんで行つて、とう／＼ちやうどその時天の安の河原にお出でになつた天照大神と高産靈神のお傍までとんで行きました。その時高産靈神は、下界から逆さに矢が返つて來たのでおどろいて、御覽になると、矢の羽に生々しい血がついてをりました。その上よく見ると、それは八年前天若彦に持たしてやつた天のかぐ矢でした。高産靈神は、外の神たちにこの矢をお見せになりながら、

「それは昔天若彦にやつた矢だが、これが天若彦がほんたうにあの時の言付どほり此の矢で悪い神たちを退治してついた血ならば、決して天若彦には當るな。さうでなくて天若彦が



悪い心になつてゐるならば、この矢はすぐに天若彦の禰になれ。」

かう仰しやつて命はその矢をとつて、今しがた矢がつきぬけて来た穴から、下界へおつき返しになりました。すると、矢は案の定、天若彦が何にもしらす床の上に眠つてゐた胸の上にくさりときさつて天若彦は殺されてしまひました。選し矢が恐ろしいものだといふたとへも、唯手の一人供を兼ふと

しつた、いらしつたといひながら、大せい苦つて来て、命の腰にかじりついたり、手足を引つぱつたりしました。

すると命は眞赤になつて怒り出し、「わたしは仲のいい友だちが死んだから葬ひに来たのだ。それを汚ならしい死人と間ちがへるなどは、とんでもない奴らだ。といつていきなり腰につるしてゐた長い剣を抜いて、死人を納めた喪屋をばら／＼に切り倒した上、足蹴にかけて蹴とばしたまゝ、後をもみすに天へ還つて行つてしまひました。その時蹴とばした喪屋が出雲國から美濃國まで飛んで行つて、藍見河の川上の喪山といふ山になりました。生きた人が死んだ者に間ちがへられることは、神代からこんなに嫌つたものなのです。

さてこの味鋺高彦根命は、大へん綺麗な神さまで、體から明るい光が射して、此方の山から向ふの山、此方の谷から彼方の谷へと光りをのこして飛んで行きました。それを見た妹の下照媛が

「天なるや 弟たなばたの
うながせる 玉の御統 御統に

いふこともこれからはじまつたといふことです。天若彦が死んだので、お妃の下照媛は悲しがつて毎日毎夜おい／＼泣いてをりました。その泣聲があんまり高いので、風につれて天まで聞えました。それで高天原から天若彦のおとうさまの天津國玉命だの、天若彦のお上さんや子供たちがぞろ／＼下つて来て、天若彦のお葬ひをしました。

お葬ひの仕方は、山の下に喪屋といつて死人の棺を納める小屋を作り、雀を頼んでお供物のお米を舂いてもらひ、翡翠を頼んでお料理番をしてもらひ、河の鴈を頼んでお供物を上げてもらひ、雉を頼んで泣女の役をしてもらひ、そして鷲を掃除役に頼みました。かうしてお葬ひの支度ができたので、親類や友だちの神たちが喪屋のまはりに集つて、八日八夜の間音楽を上げて、死人の靈をまつりました。

その時下照媛の兄さまの味鋺高彦根命も、お悔みにお出でになりましたが、この神はじくなつた天若彦と大へん顔かたちがよく似てゐるので、天から下つた天若彦の妻や子供たちが間ちがへて、

「おや／＼天若彦はじくなつたと思つたら、まだ生きていら



あな玉はや
み谷二わたらす
味鋺高彦根の神ぞや

といふ歌を詠んで、お兄さまの命だといふことを皆にお知らせになりました。

二、國ゆづり

さてかういふわけで、天のお使が二度までしくじつてしまつたので、天照大神はまたく八百萬の神たちと御相談の上、高天原で一ばん武勇の勝れた神さまを擇り出すことになり、經津主命と武甕槌命といふ二人の神さまが、天からお下りになる事になりました。經津主、武甕槌二人の神さまは出雲の國の稻佐の小瀧といふ所にお下りになつて、まづ大國主命をお呼び出しになりました。大國主命が何ごとかとおもつてお出でになると、二人の天神たちは、腰についた長い剣をいきなり抜いて、琴突を上に向けて、こ



これは天においでになる美しいなばた姫といふお姫さまの首にかけた飾りの玉の様に、美しい光をもつて、二つの谷をかけて輝きわたるこの神は味銀高彦根命といふ神で、天若彦ではない。あのふしぎな體の光を見てもそれは分かるではないか。といふのです。

れを激の程のよに、突き立てました。大國主命は腰を帯るのかと思つて、目をまるくして見てお出でになりますと、二人の神はいきなりその劍の尖にあぐらをかいて坐つたので、いよくびつくりしてしまひました。

その時經津主命と武甕槌命はおごそかな聲で、大國主命に向ひ、

「われくは高天原から、天照大神と高産靈神のお言付をうけて下つて来た。あなたが今治めてゐられる日本國は、大神の御子様の御領地と始めから極つてゐる國だ。素直に差し上げるかどうだ。」

と言ひました。

すると大國主命はしばらくお考へになつて、

「わたしはどうに隠居して國の政治も子供たちにゆづつてありますから何ともお答へはできません。王子の八重事代主神に聞いて頂きたいが、あいにく今日は三保の崎へ、魚を釣りに行つて還つて來ませんからしばらくお待ち下さい。」

と答へました。すると天神たちは、

「いや、我々は返事をいそぐのだ。」と言つて、天の鳥船とい

ふ空をとんで行く早船をやつて、事代主命を迎へにおやりになりました。

やがて事代主命は還つて來て、急の用向をきくと、大そう畏れ入つた様子で、お父さまの命に向ひ、

「お父さま、これは長多いことでございます。この日本の國は早速天神のお子に差し上げて下さいまし。」

かう言つて、自分は拍手をほんく高く鳴らして、そのまゝ乗つてゐた船の舳に立つて、舟を引つくりかへしますとそこに青々とした柴垣ができました。その中へ命はとび込んで姿をかくしてしまひました。

そこでお使の天神たちは、また大國主命に向つて、

「事代主命は素直に國をゆづつて、自分も海の中に入つてしまひました。この外にあなたのお子で、相談をなさる神がありませんか。」と聞きました。大國主命は考へて、

「子供は澤山ございますが、かういふことの相談は三男の健甕御名方神、この一人だけに爲て頂けばよろしい。」と答へました。

さう言つて居りますと、その時ちやうど健甕御名方命がうし



ろからやつて来ました。命は手の先で軽々と、千人力の大石をつまんで来て、天神の前にぶら下げながら、

「貴様達はおれの國へ来て、何をこそく相談をしてゐるのだ。ぐづく言つてゐると、さあこゝへ出て来ておれと力くらべをしろ。」と言つて、いきなり大石を、天神の頭を越して海の中へ投げ込みました。その石がそのまゝ島に化けたのが、今も出雲の稻佐の浦沖にある嵯島といふ島です。

しかし二人の天神たちは、馬鹿にしたやうな顔をしてまるで聯合りませんから、斷絶命はくちしがつて、いきなり

經津主命の傍によつて、その手をねぢり上げようとしていますと腕はいきなり透きとほつた氷柱になつて、さはつても手が凍えてちぎれさうになりました。命はおどろいて手を引込めましたが、それでも負けない氣ですから。此度は武甕槌神の腕をつかまうとしますと、それが兩刃の劍になつて、ぎらぎら光つて、もう少しで命は指をばらばらに切られてしまふところでした。命はいよくびつくりして逃げ出さうとしますと、武甕槌命は怒つたやうな聲を出して、

「卑怯もの、逃げるやつがあるか。さあ手を出せ。此度は貴様の番だ。」と怒鳴りながら、いきなり健御名方命の腕をつかんで、まるで葦の芽でもへし打るやうにへしつぶして、命の體を十町も先へ投げ出してしまひました。

健御名方命は、もうとても叶はないと思つて、後をもふりかへらずに、どん／＼どん／＼逃げ出しますと、二人の天神も何處までもと追つかけて來ます。とう／＼出雲の國から信濃の國の諏訪湖の岸まで追ひつめて、健御名方命をつかまへてしまひました。命は殺されさうになつたので、絶體絶命の

「わたしを殺してはいけません。殺してはいけません。もう決してこゝから何處へも行けません。お父さんの言ふこともきゝます。兄さんのいふこともきゝます。此の日本國は天神のお子に上げます。」と言つて、降参してしまひました。

さて健御名方命が降参したので、命の命を助けて諏訪の湖水に封じこめ、二人の天神は出雲の國にかへり、改めて大國主命に、

「あなたの子供たちは事代主も、健御名方も、天神の命令に背かない約束をしました。ところであなたのお考はどうです。」とたづねました。大國主命は、



「子供たち二人の申しました通りにわたしも爲たいと思ひます。此の日本の國は仰せのまゝに差上げることいたしますが、それについて一

つのお願ひは、この後わたくしの仕むべきを天神のお子たちの天下を治めるお宮とおなじやうに立派につくつてください。さうすればわたくしはそこにこもつたまゝ再び世の中へは出て來ません。またわたくしの子供はみんなで百八十人もある夥しい数ですが、兄の事代主が天神の御家來になつて仕へることになりましたから、この上は誰一人をむくものはありますまい。」

かう言つて、大國主命は姿をかくしておしまひになりました。そこで大國主命のお言葉の通り、出雲の國の杵築に宏大なお宮を建てて、命のお住ひに差上げました。それが今の出雲の大社です。

さて經津主命、武甕槌命二人の天使は、首尾よくお使の役目をはたして、天へお上りになり、日本國の平定した趣を、大神に申上げました。

これで永らく日本の國を治めてゐた大國主命の一門の舊い神さまたちの世は終つて、天から下つた日の神のお子たちの新らしい御世になりました。(つづく)

かなく

野口 雨情

遠いお山の

蛸は

ひとりぼっちで

なきました

母さん たづねに

出かせせう

父さん たづねに



出かせせう

遠いお山の

蛸は

ひとりぼっちで

なきました

日さへ暮るれば

かな かな

目さへさませば

かな かな



自由 畫「ウタヒ」(賞)

東京市外中區谷六二〇 櫻井成忠



童謡 野口雨情選

東京 日向ちる子

煙の細の細道で

どなたか〜云ひました

「麥は緑でいい色よ」

「空も水色いい色よ」

どなたか〜云ひました

ほたる

大阪 水田公二

青い火とほして

飛んで来い ほたる

甘い露 いっぱいある

飛んで来い ほたる

お寺の銀杏

東京 藤田圭雄

高いかね
高いとも高いとも
のつほなんだよ

螢

東京 在原桂子

螢 月の夜は

かやつり草で

蚊帳を釣つてお寝み

蟻の行列

岡山 石井謙三

蟻の王様行列だ

家来もお伴も行列だ

紅い樺の木の下に

長く並んで行列だ

かくれご

愛媛 日野まさる

かくれごしない
ちやんけんほつ
そらら 美代ちやん鬼よ
あら わたしいやだ

嬉しいではないの
緑の野原に

うたつてゐる鳥は

嬉しいではないの

学校の裏に

うたつてゐる鳥は

燕

臺灣 田中和人

燕が来た来た飛んで来た

海を渡つて飛んで来た

燕は夏の旅行者だ

夏の世界の旅行者だ

さんば

山口 國廣きくじ

むぎとんほ むぎとんほ

金の目玉をくりぬいて

二つそろへて おいて行け

雲

京都 近江谷金代

空の夏ぶとん

雀の奇合
幸天小川羊二

背戸の柳の木に

雀の鈴なり

明日は雨だろ

くもりだろ

南風

新潟 富岡まつみ

紫さんく お引つ越し



(賞)「花」畫 自由

夫英野長 一尋校學小園高外市京東

愛知 尾關照代

常陸 菜村葉三

煙草のすひから拾つて

天じよ向いちや あつはつは

下を見ちや あつはつは

よるこび

自由畫「夜景」



秋田縣大館町 小笠原二郎

すつてんころり
と達磨さん
ドコイシヨ
ドコイシヨ
赤い顔して
ウームウーム
百足
神奈川
小澤 尊子
百足が一匹
お足が千本

雲 雀
長野 湯澤喜八郎

破けて何が出た
ふわ／＼眞綿
一頁目 二頁目

かたつむり

東京和田光子

芋の葉の上の蝸牛
山椒の木の葉の蝸牛
皆なでそろつて角出した
だるま

お月様

静岡 榛葉春子

白い兎さん
お月さん下さい
ほーんと投げて下さい
丸いお月さん下さい
ごころてん

學校

東京 小花吳郎

蛙

秋田 能登澄子

蛙 蛙 泥蛙
軸の紋附 縞股引
へい へい へい
今日は

鳥

東京 北澤ふじ子

ちんばの犬
大阪 岩見清三

米食ふ鳥と
粟食ふ鳥は



「苺」畫 自由

郎 五 正 木 鈴 九一通町目北市臺仙

かへる

東京 島田君江

職工

静岡 杉山しん子

夕立

東京 鈴木一誠

空はすみのようになつて
かみなりさまがめばたきました



若山山牧年詩
若山山牧年詩

船出し(賞)

福井縣高濱町 梅垣磯五郎
小學校高二

「ヨイヨイヨノ」ころころころ、
ソレ「ヨイヨイヨノ」ころころころ、
船は水につかたつた。
一人の男がおしながら、
ちよいと乗つて、
ぎつこんく沖の方へ行つた。

評、小さくなつて行く舟の姿が見えてます。(牧水)

あかんぼ(賞)

茨城県真壁郡 齋藤八郎
若柳校尋六

去年の今ころ
あかんぼが
あせをひいて

死んだつけ。

評、可哀相だと思ふでもない、思はぬでもない、幼い兄さんがよく出てゐる、ほんとに子供々々しい歌だ。(牧水)

まち

長野縣飯田 根津 強
小學校尋一

ウマガオルシ ウチモアルシ
ニギヤカダ ワイノ。

評、ソシナニニギヤカナマチニラタシモイ
ウチミタイナア。(牧水)

わごばた

東京市數矢 小林 利雄
小學校尋四

朝早くから
わごばたで
人聲多い

今日の目よ。

評、少しませた口調だが面白い。(牧水)

ね

山梨縣小淵澤 加久保 保
小學校尋六

綴方

編輯部選

牛のなんざ

大阪府天王寺 山田 静子
師範附屬四年

私が學校へ行く道に、こうしん橋といふ橋がある。橋のてまへにさか道があります。そこを牛が上つてゆくのを見るとほんとうにかはいさうです。

よこはらがあかくなつてづりむいてるても、力を入れてひつばつてても上れません。牛についてる男の人が、せなかをびしやりとはつて牛に力をつけると牛はよう／＼上りました。牛はうれしそうにあるいてきました。私は男の人がきつい人だと思ひました。

薬取り

埼玉縣志木町 並木 燦
小學校尋四

外は雨がしと／＼ふつてゐる。家では兄さんが病氣なので、僕は薬を取に行か

おい者のさんのうちへ行くも、大ぜいのために二時間も二時間もまつてゐるが中薬をこさへてくれさうもない。それはいゝが、あいにく僕は外にまたされてゐたので、まんとへ雨水がしみこんでもうき物までびしょぬれになつてゐた。さうかうしてゐるうちに、學校もはじまつたらうと言ふしんばいでむねが一ぱいになつた。その内にお母さんが心ばいしてむかへに来て下さつたのはつと一いきをついた。お母さんはかばんもはかまももつて来て下さつたので、いそいでしたくをしてとぶやうにして學校へ行つて見ると、も早じけふははじまつてゐた。

先生にわけを話すと「さうかそれはえらい」とほめて下さつたので、今までしからはしまいかと思つてゐたことが、やつときゆるやうにとりさらされてしまつた

五厘錢

茨城県眞壁郡 海老澤 勇
若柳校尋六

106

なくつてはならない。まだ時計は七時だつた。さつそくまんとを着てくすりびんを手にもつて出かけた。



自由畫「牛」
福井縣高濱小學校高二 川端 喜一

自由畫「傘直シ」
福井縣高濱小學校高二 淺田 鼎一



母がよく言ひます。「このやらうは五厘飲んでな。」とおれの事を人とはなす時が度々あります。おれが三つの時であつた

うちのねこは昨日からちつともごはんをたべないから子をうむのだと思つてすをこしらへてやつたらばすにはうますにそのばん私のねどこにはひつて一びきうんだ

かはいらしい子だあたまのところがちよつとくろくをかくろくてあとはみんなまつしろな子猫だ。

野、いかにも一生懸命といふ所が見えてゐます。だからこんな長い歌が少しもだれてゐません(牧水)

にほひ

茨城縣鹿嶋郡 大場六一郎

先生は先生くせ、いろ／＼、にはひある。

野、君はいつたい何くさいか。(牧水)

母校の思出

東京府千駄ヶ谷 服部春子(十四)

私はみだれたる机の中を整頓すると色々な物が出た書方圖畫の成績友の手紙などなつかしや

野、これも一生懸命にまじめだ。しまひの句の「なつかしや」はたいへんいゝ。(牧水)

つみき

大阪桃岡小 長尾その子

赤や青できれいなつみきのきしやができた。

さうです。おれがよた／＼長火鉢のそばへ来ると、五厘錢がのつかつて居ました。おれは何んの氣なしに、つかんでなめたり、ひんだしたりして居て、しまひになつて、口へ入れたらどのの方へ入つて取れなくなつてしまひました。

そして「あん／＼／＼」と泣いて居ると母がどつかからかけて来て、しやんぢやくの方をどつとはたきました。そしたらけるつと一ペンせきして、五厘錢が出たさうです。

こじき

山梨縣北巨摩郡 向山まつ江

とつくにおじいさんのおはかまへの日に私のうちへこじきが来ました。そして私のうちでおはやおかすののこつたのやおすいものや米をやるこじきはうれし／＼ながはをしながらふ／＼とを出し

あつと思ふたこと

京都府師範 服部 正 毅

僕の家昨日お客があつた。僕は母にたのまれて、一圓さつをもつておくわしを二斤半かひにいつた。

くわしやの前まで行つた時、僕はふところをさがしたらさいふに入れたはずの一圓さつがない。「あつ」と思つて、あはててふところやおひのあたりをさがしたががない。しやつほけつとへ手を入れると、何だか物がさはつた。やれ／＼と思つてだして見ると、四つにおつた一圓さつであつた。その時はまことにうれしくつてむねがすつとした。

ながら米をこほしました。またおかあさんが米をやるよろこんでさほうやにんじんをたべながらうれし／＼にもらいました。おかあさんたちが「うれし／＼かい」といふと「ええ」といひました。おかあさんたちが「またこつ」といひました。

「又くるからひるめしをよんでおくんね」といひました。又私のうちであそんでいとけさよさんのうちへ来ましたからいつてみますとおばあさんがむすびをやる「いま一つおくんね」といひました。おばあさんがおこるとさう／＼外へ出て又私の方へ来て「おまんまをよんでおくんね」といひました。おかあさんがおざから「いま一ぺんえおくんね」といひました。こんどはおつゆをかげんでやつてもよろこんでたべました。たべてから「さけもおくんね」といひましたから「さけんかはおちつともない」といふと「ほん／＼やおさけのかはりにいゝ一ぺんおく

體操の時間

神奈川縣 小 澤 幸 子

先生の號令が校庭にひびくと、何日も長屋の子供らが見に来る。今日も五六人裏門の鐵棒につかまつてのぞいてゐる。一ツ二ツ三ツ四ツといふ號令が向ふの教室にあつてオウ／＼とこだましてくる。すると、裏門の方から「熱海の鹽瀬の子ツ」と子供たちが大きな聲で呼ぶ。「熱海の鹽瀬の子ツ」とまた呼ぶ。あつちでもこつちでもタス／＼笑ふ聲が聞える。熱海の鹽瀬の子とは文ちゃんのことである。みんなはクス／＼笑ふので力ぬけがしてしまつたのに、文ちゃんばかりは赤い顔をしながら先生と一しよになつてやつてゐる。

先生はたまにかねたらしく「休ムツ」といつて、子供たちの方をむいて「ボツチャン／＼いゝ子だからね、あつちへ行

むぎ

山梨縣小淵 遠藤 まき子

むぎがむぎばたけで
ほをだして
風にゆられて
あつちへころび
こつちへころびしてゐる。

川

光徳小學 鷺見 都恵

小川に雨が降つてゐる
水はちよろ／＼
流れてる

風鈴

愛知縣愛知 川地 榮一

ちりん ちりんと
風鈴が二階ですゞしく
なつてゐる

ぐみ

山梨縣北巨摩郡 奥水 正次

一ばんさきはあをく、
二ばんめはきいろく、
三ばんめはあかく、
四ばんめははじからくふばかだ、
五ばんめはひとつもないようになる、
またらいねんなる。

犬

愛知縣豊東郡 大竹 亮寛

お使に行つて
木の下に休んで
寝ころんで口笛ふいたら
知らぬ犬が飛んで来た
尾をふりながら。

つておとなしくしてくつさい。」となれな
れしくおつしやつた。くつさい」といふ
お園訛りの言葉が出たので私たちはまた
笑つた。おちさん、僕もう言はないよ。
だから見てゐていゝだらう。」子供たちは
おとなしくさういつたので、先生は「ウン
ウン」といつてこつちへこられた。その
時、チャン／＼／＼と終の鐘がなつ
たので、私たちはホツとした。

兄さんの寫眞術

神奈川県川崎 村上 清夫

家の兄さんはひまさへあれば寫眞器を
いちくつてゐるので、家の者は兄さんの
ことを寫眞狂といつて居ります。或日の
ことでした。兄さんは僕に寫眞をとつて
やるといふので、僕はこの前寫してもら
つた時に頭が半分かけてゐたので、兄さ
んに頭のない寫眞なんがおことわりしま
すよといつてやりました。すると兄さん
は怒つて生意氣いふな、きさまにはもつ
んがかあいさうになつてしまひましたの
でおせいじをいつたら、又ビシヤリとひ
つぱたかれてしまつて馬鹿見てしまひま
した。

海水浴

福山市 廣井 千代子

向ふでは男の子が足をあけて、ビチャ
ビチャ白い波を散らしながら泳いで居る
こちらでは、女の子がスースーと静かに
泳いで居る。兩側には千鳥のうきがボク
リと二つ浮いてついで行く。
幼稚園へ行く位の子も、浅い所で兄さ
んや姉さん等の眞似をして居る。水から
上つて、海岸で砂をもつて遊んでゐるも
のやからだ中に砂をつけてねてゐるもの
がある。
磯に立つて聞いてみると、ガヤ／＼と
わけのわからぬ聲が耳にはひつてやかま
しい。子供はまだ面白さうに海水浴をし
て居る。

昨日の...

千葉県東金 板倉 とみ

昨日學校からかへつて私がきくちやん
の所へあそびに行きました。二人でなわ
とびをしておもしろくあそんでゐる所へ
重ちゃんといくちやんが来て、「入れたい
よ。」といひました。私は「ああやつたい
よ。」といつて四人であそんでました。
やつとおもしろくなつたと思つたら、口
けんくわをしました。私が持つ時に高い
だのひくいだのといひました。私は「だ
つてそんなに上手に持てないだもの。」と
いひましたら、「おほまよう」とかほを見
合せました。私もその時何だかへんな氣
分になつてしまひました。私もいやだか
ら、おちやらない。」といひました。すると
「あらようまたおこつただよ。」といひ
ましたので私はうちへかへりました。そ
してお母さんにおしへましたら「何でも
いいから、べんきやうでもした方がいい
さ。」といつたので私はべんきやうをはじ
めました。三人は何だかおもしろさう
に大きなこゑをやつてゐました。



信通

夏と自由畫

山本 鼎

▽これが雑誌に出る頃はみなさんは、夏休みのまつ最中でせう。夏は、影日なたの調子も強く、すべての色が濃く、すべての形が威勢のいゝ季節です。――澤山に畫をお描きなさい。寫生をしないさい。寫生には色がすぎなれば鉛筆か蠟鉛筆が一番です。水彩畫の具はよつほど高いのでないと色の出がわるい。描き方にいろいろ不便がありますから。鉛筆、チークの類をおもにお使ひなさい。▽夏は雲と空との感じが強いです。大いに雲と空を描いて見ませんか。朝の空、晝の空、夜の空、街の空、山の空、海の空。――雲の峰はよほどはしつこく寫生しないと駄目です。夕陽をうけて赤つ面の大入道になつた舟など畫に寫して、立派な夏畫でせう。

れを是非描いて見るんです。横に日なうけた入道雲は、どうしたって陰日なたを見て描かないとむく／＼した感じが出来ませんね。――たいて二時頃よく夕立がやつて来ます。また、く間に空が藍色に變る。風が騎兵のやうにやつて来たかと思ふと、細びきのやうな雨で天地が一ぱいになる。其雨のすぎ去つたのちの氣もちはすばらしいでせう。窓を明けて見ると、きつとどこかに虹が出て居ます。又銀色の紐で縁をとつた藍色の雲が立のぼつて居ます。すべての木の葉から雨の粒が滴りおちて、地面を縦横に水が流れて居ます。――夏は實に描き度くなるものが澤山あります。お描きなさい。寫生をしないさい。氣樂に、活潑に、描かうと思ふ物をよく見て精一つばいに描きなさい。▽僕は樂みにして、みなさんの夏休みの土産を持ちませう。(七月二日)

幼年詩選後

若山牧水

歌つてあることからの深淺巧拙よりも、私は先づ歌を作らうとする時の作者のこころもさきどこの位な正直にその歌に通つてゐるか、描きかたの如何に當つてゐるか、それから目書いてくださう。原稿は出来るだけきれいに書いてください。鉛筆なら黒やインクで、用紙も、牛紙か、原稿用紙をつかつてくださう。難題のきればはしみたいなものばかりです。それから文字のあまり小さいものもいけません。そして、○や、は一字分として、十八字語が二十字語かに書いてくだされば申分ありません。

今月の推薦童話

▽今月は普通の募集童話の選をするつもりですが、大懸賞募集の童話をあつたまゝでおしまひにしてしまふのが惜しい感じがするし、それに應募者の諸君にもお氣の毒な感じがするので、兎に角もう一度だけ佳作を掲げて、これだけでいゝ／＼おしまひにして、來月から普通の募集童話の中から推薦することにします。▽哀れな鶉の話――この作者は傷けられなやい藝術を持つてゐると思ひます。この人の書くものはいつもそうです。讀んでゐて胸のすく感じがします。たゞ話の筋を書くだけのものが多く中で、この作者のものは光つて

新しく出た本

◆森の祈り (神野岩三郎先生著)「母と子文庫」の第三篇で、神野が生る苦心になつた長篇讀物です。時丸とかのえといふ兄妹が貧しい百姓の子でありながら、美しい、勇氣にみちた心をもつて生立つて行くお話を書いたのです。そして、まだ見ぬ父親にめぐりあふ處でお話が終わつてゐます。この本を讀まれた方は必ずこの作の主人公のやうにいき／＼とした美しい少年と少女になられるでせう。理想的少年少女小説として、是非一讀をおすすめします。四六版二五九頁 定價金巻圓五十錢 東京小石川戸崎町創文社發行

◆家の無い子 (楠出正雄先生譯)――エクトル・マローの「サン・ファミユ」の全譯であります。サン・ファミユの名はすでに世界的に著名なもので、我國に於ても、未だ見ぬ親」あるひは「家無き兒」として異常な評判を得たものです。主人公ルミとして少年が由緒ある家柄に生れながら、不幸にして早く孤兒となつて、諸所方々を流浪して艱難辛苦をなめるといふまことに哀れな物語であります。その間にあつても美しい心や氣高い品性を立派に養つて、遂に自分の心や氣を、

前にまであつて、その上、名譽ある名士の主人とまでなるのであります。かういふ名譽が立派な全譯となつて出たことは喜ばしいことです。(四六版六四四頁、東京市牛込區津久土町六福野書院發行 定價二圓五十錢)

◆日本民話名作集(野口雨情、霜田史光兩氏共編)昔から傳はつてある民話數萬の中から日本民話として藝術的に價値のあるものだけ二百餘篇を厳選し何現代詩人十三氏の傑作民話も加へ本居長世氏の作風も添へてあります。民話愛好者には勿論のこと童話を學ばんとする方にとつても此上ない參考書となります。裝幀と挿畫は加藤まさる氏が苦心を凝しただけほんたうに氣持のいい本です。(中版三二〇頁、函入、定價一圓八十錢、送料八錢 東京牛込区五軒町民衆文藝社發行)

◆赤い緞緞と人魚(小川未明氏著)藝術は聲から出發するが殊に童話は子供を愛さなくては書けない。その眼に寫つてくる子供は、そこらにあるどんな子供の姿でもよい。本當にその子供の生活を理解して、自分の涙にうるんだ眼の中に浮べること、於てのみ一種の感激は生じ、そこに創造の世界は構成される」と著者は高らかに言つてをられる。著者の童話ばかりいふ心算から生れたものでありますか

綴方を作る人に

選者

今月は總體に不出來でした。別に批評するほどのものもありません。もつと努力して下さい。土衛さんのけ相當いゝものでしたが紙面の都合で出せませんでした。

ある。作の質からいふと、唐櫃の魔物よりも優れてゐます。有望な将来を持つた人だ。

▽「唐櫃の魔物」——には藝術の香りの乏しいうらみがあるが、一寸フアラビヤン・ナイトに見るやうな、怪奇な情緒が面白く出てゐるのをとりまです。怪奇といふ事には空想が十分に

出るので面白いのです。童話から此種類のものをとつて了ふと淋しいものになります。

叙述にはところ／＼ひどく生硬な處があつたので、それは多少改めて置きました。

歡樂に酔ふてゐながら、明日のことを考へて不安に襲はれる虎市の心持ちは暗示深いものだ。また、この話の山でもありません。

▽この外須江氏の「山猿の話」や蒲田氏の「忍子の辛稻」や荒井氏の「蜜柑畑の神様」や松本氏の「山猿の恩返し」や明法寺氏の「狐と小僧」などは非誌上に掲載したいと思つてゐたのですが、そうしてゐると毎月集つて来る童話の方の推薦が出来ないので、何れ様を見てあげます。今、齋藤素果氏の作や白井さんなどの面白さうな作品が澤山に集つて来てゐます。(齋藤佐次郎)

童話の選後に
野口雨情

皆さんがわかりになるまで、くどいやうでも繰り返して云ひます。童話は唄ふためのもので、讀むためのものではありません。な

んに限らずものごとが盛んになつて来ると人はいへる／＼と理屈をつけて見たくなるもので

す。理屈はつけやうでどうにもなりません。本質だけけうごかせません。唄ふといふのが

童話の本質で、讀む童話と云ふのは本質では

ありません。皆さんが理屈に迷はされて、「唄ふための童話」を忘れたとき童話は邪道に

置きますが、とつびなことを云ふのが、新しい、いい童話だと思つて、そればかり考へ

てゐる人がありますが、それは大變な間違ひ

です。却つて、なんでもないとこゝろに、いい童話が澤山あります。

今聞、掲載外のぶんで、いい作と思つたのは、花屋の鷺島(吉田六花)、看護婦(秋谷マサ)、子狐(藤代治秀)、狐の火(赤木榮鸞)、鶯(龜山鎮雄)、風(二瓶けい子)、手まり唄(昌榮枝)、六月の雨(三浦節夫)、お香戸の坂(神原直一)、星の落着(近藤九菜)とんぼ(白井正一)雲(西村禮郎)、朝換(鈴木友花)、舌出人形(岩見清三)の十四でした。そのほかのは本誌の選

家庭に、學校に、書齋に、
應接間になくてならない

金の船の合本

- ▽第一輯 (第一巻初號より第二巻四號まで六册合本) 第四回製本出来 定價一圓五十錢
 - ▽第二輯 (第二巻五號より第二巻十號まで六册合本) 第三回製本出来 定價一圓八十錢
 - ▽第三輯 (第二巻十一號より第三巻四號まで六册合本) 第一回製本出来 定價一圓八十五錢
- (註) 価格は岡本路一、妻伯新案の意匠になり、「金の船」金文字入、極めて美本)
- △金の船 世界名作童話集(全一册) 定價三十五錢
- △アンデルセン 船

金の船誌友募集

誌友になられた方には、大特典と、便宜とがあります。誌友規則書は、編輯所宛にお申込みになればすぐお送りいたします。

ら、藝術味の豊かな點に於て殆んど獨歩の觀がありま

す。(四六版 二〇二頁、麹町區飯田町一ノ二天佑社發行 定價一圓六十錢)

◆鳩のお家(大井冷光著)——大井冷光全集ともいふべきもので、大井氏の主なる作が全部この集に入つてゐます。何れも少年少女向き

のやさしい面白いお話ばかりです。お話の数が五十五篇、最後に有樂座で先頃演ぜられた「あはて木兎」がのつてゐます。私どもは

小供の讀物のために一生を捧げられた亡き大井冷光氏に敬意を表します。そしてこのお話を集を皆さんが是非お讀みになる事もおすめ

します。挿畫と装幀は本誌の岡本先生の筆になつた美しいもので、(四六版 五七〇頁、定價金參圓 東京神田眞神保町富山房發行)

◆お伽の日本(竹貫佳水氏著)——巖谷小波先生のお伽三十年生活をお祝ひするたためにお伽作家から得意の作一篇づつ集めた紀念

の出版です。作者が大勢なだけに餘計面白味のある、大層きれいな本です。(四六版 五一八頁、定價金參圓 日本精進文館發行)

◆日本民謡集(生田春月氏編) 昔からの民謡を集めた本です。この本があれば民謡の歴史が一目でわかります。民謡研究家には大變に便利です。(編者藤田四郎、定價一圓五十錢、發行所 神田區神保町富山房發行)

- ▲自由書作
- △汽車(福原白土著) △時計(東京井筒正) △クマ(愛知川原二郎) △豚(愛知木村純久) △家(北海道雲井芳子) △風船(東京田中禮久) △家の屋根(下關古原杉市) △五月雨(大阪山田静子) △イオンツバ(北海道寺西福法) △なづき(愛知栗本寛一) △説(山形斎藤興助) △學生(東京鈴木利雄) △子守(福井胡問六郎) △さくら(愛知神谷貞雄) △狐の兄さん(下關向野嘉代) △屋根(京都近江谷玉井) △うらわ(東京田中貞子) △家(京都藤田紫唾) △ひこい(神戸二瓶正子) △海(下關白野鏡子) △帽子(愛知藤田正雄) △床の間(東京伊藤登良男) △メダカ(長崎西島助雄) △私の家(東京黒澤正尾) △朝鮮人(朝鮮李徳季) △陣取(福井鳴戸正直) △家(福岡山王堂著)
 - ▲幼年詩佳作
 - 魚釣(静岡小林梅子) ○うづ(福井胡問六郎) ○ゆきの下(山梨進藤けい子) ○ウマ(桃園長尾港太郎) ○だいらん(あらひ) ○福井杉野トヨ ○燕(福井山本勝彦) ○やなぎ(山梨進藤けい子) ○梅の木(山梨山田まさ子) ○シイタケ(東京長野英夫) ○つゆ(東京京馬田君江) ○雲(愛知加藤義男) ○夕立(東京鈴木一誠) ○職工(静岡杉山しん子) ○はげ山(不明坂清) ○昨日の雨(不明坂春子) ○雲(愛知竹貫義雄) ○ロバ(愛媛西坂ヒサ子) ○先生(福井齋藤三郎) ○まじ(山梨三井みどり) ○一年生(東京井筒正) ○夜の月(東京大西誠一) ○れすみ(長野宮崎直郎) ○隣の庭(千葉羽石さき) ○水車(横須賀佐藤正夫) ○雨の日(東京服部洵) ○お芋の葉(東京日向桃子) ○お

編輯だより

▲金の船八月號は、ごちの家庭からも涼しい夏の雑誌として歓迎されました。先づ第一に岡本一先生の描れた口繪「徑の木の下で」は大木の下の涼しさを思はせました。



讀者通信

山六爺さんは進めば進むほど面白くなつて来て、皆さんから「この先はどのようになるか聞せて下さい」と云ふお手紙が編輯局へ澤山来てをります。

▲僕の方のクラスに、「金の船」をよんでゐる人は十五人居ます。此からとつてゐるのは僕だけですが、今に書ける人もせつと本誌から君からの面白い夏の讀物として大變な歓迎を受けました。

▲毎號附録の沖野岩三郎先生苦心の作「後の」

▲口繪に就きまして近頃のも限りなく結構でゐいます。唯以前の「ミニイとミニイ」のやうな清楚でまた温雅なものも時折はしと、口繪を見まして鳥渡さう存じました。(希草)

▲金の船の船主 〇若手及川金一 〇長野正雄 〇山形中川周司 〇山形佐藤欣造 〇大分山中南山君 〇麻布四宮勝君 〇千葉前田茂雄君 〇東京梅田悦三君 〇京都林田信子君 〇山形奥田昌夫君 〇千葉西田よし君 〇青森龜井宗一君 〇三重安岡信三君 〇石川田中せつ子君 〇栃木安井常二君 〇和歌山鈴木虎次郎君 〇愛知岡田正樹君 〇滋賀山崎貞治君 〇福井西林とし子君 〇東京東末次郎君 〇兵庫山田守浩君 〇秋田二瓶敬十君 〇山形益田盛藏君 〇山口森田清次郎君 〇北海道平松松三君 〇北海道北村ふんこ 〇和歌山江田六郎君 〇岐阜中島五一郎君 〇京都山田定兵衛君 〇静岡山崎久之助君 〇東京北村謙三君 〇千葉佐々木清樹君 〇大阪松田肇君 〇長野宮崎精一君 〇埼玉瀧川武一君 〇京都原口辰男君 〇神奈川小川新一郎君 〇石原島得三君 〇大分森田雄藏君(以下次號)

▲讀者通信 〇私に金の船の愛讀者でございませぬ。金の船の雑誌は高尚で上品な雑誌と思ひます。私に西條先生の「繪圖めぐり」が大好きです。おしまひにどうなるのでせうか。あやちゃんばままとのお家へお預りになるのでせうか。わたしそれが心配でなりませんわ。迷ひ見になつてしまはないでせうか(東京 百合子)

▲讀者通信 〇私に金の船の愛讀者でございませぬ。金の船の雑誌は高尚で上品な雑誌と思ひます。私に西條先生の「繪圖めぐり」が大好きです。おしまひにどうなるのでせうか。あやちゃんばままとのお家へお預りになるのでせうか。わたしそれが心配でなりませんわ。迷ひ見になつてしまはないでせうか(東京 百合子)

懸賞創作募集

自由少年綴

◆少年少女の創作◆

山本 鼎先生選
若山牧水先生選
方……………編輯部選

〔注意〕

課題は何でもかまいません。諸君の日々見たり、感じたりすることから、諸君の好きなものを諸君の好きなふうに着たり、詩なり、文なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまいませんが、姓名は學校や學年(または住所と年齢)とおまじりにお書きなさい。用紙は自由書はなるだけ常用紙に、幼年時や綴方はなるだけ原稿用紙(または半紙)にかいてください。よく出来た方には『金の船』特製の賞品を差上げます。次號締切は八月三十日、発表は十一月號。宛名は東京市外田端三百五十一番地『金の船』編輯所。

童話

◆一般讀者の創作◆

齋藤佐次郎先生選
野口雨情先生選

〔注意〕

童話は二十字語二百行以内、童話は二十行以内、優秀な作品は『推選』または『特選』として発表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童話には二圓づつ、特選の場合は童話には拾圓、童話には五圓づつ賞金として差上げます。詳細な募集名は少年少女の創作と同じです。

母と子文庫

懸賞

文部省認定

既に第四篇『日の出づるまで』を發行せる『母と子文庫』は少年少女最良の讀物として此度文部省より認定されました。本社は此の喜びを記念する爲に、茲に空前の懸賞を以て左の解答を募集し、聊か教育奉仕の微意を表示致します。何卒陸續の御解答をお願ひいたします。

〔問題〕

- 一、『母と子文庫』第一、第二、第三各篇の題名とページ數とをお答へ下さい(書き方例)第四篇『日の出づるまで』第二三〇頁
- 二、『母と子文庫』第一、第二、第三各篇の口繪に少年少女が幾人づゝ居りますか。
- 三、『母と子文庫』第一、第二、第三各篇の主人公は何といふ名の少年少女ですか。

〔問題〕

澄子
『母と子文庫』は十一二歳より十六七歳迄の少年少女、殊に少女の方より非常なる歡迎を受けて居ります。信用ある書店にて『創文社の母と子文庫』とお書きになれば、『ア、これです』と店員はニコニコして答へます。高尚優美なる箱入、背は赤地に金で『母と子文庫』何々の文字が輝いて居ります。

〔賞品〕

- 一等 金六圓
 - 二等 金四圓八拾錢
 - 三等 金參圓六拾錢
- 〔發表〕
大正拾年九月十日
同九月十五日當選者へ通知と同時に賞品進呈
- 〔用紙〕
ハガキ。
- 〔宛名〕
東京小石川戸崎町九〇
創文社懸賞係り 御中

一一八
(本號に限り金參拾五錢)

定價 壹冊 參拾錢 送料壹錢
三ヶ月分三冊(送料共)九拾錢
半年分六冊(送料共)壹圓六拾錢
壹ケ年分四冊(送料共)參圓六拾錢
但し新年號四月號九月號は特別號で廿五錢です。御注文の節はこの特別號だけ必ず一冊五錢づつ加へてお申し込み下さい。
振替口座東京〇五七貳番

〔送〕
御注文は必ず前金で御持込下さい
金 〇 送金は振替が一番便利で御座います
の 〇 切手代用は(裏紙切手)一割増しです
注 〇 第何巻第何號よりと書いてください
意 〇 住所姓名ははつきり書いてください
廣告料は御照會次第お答へ致します

大正十年八月六日印刷納本(毎月一回)
大正十年九月一日發行(一日發行)
編輯人 齋藤佐次郎
發行所 東京市外田端三百五十一番地
印刷所 東京市小石川區久松町八百八拾號 吉
印刷所 東京市小石川區久松町八百八拾號 吉
東京市麴町區飯田町六丁目二五
發行所 キンノツツ 社
電話九段貳七五貳番
東京市外田端三百五十一番地
電話小石川三三八七
電話小石川三三八七

『母と子文庫』顧問及贊助

- 巖谷小波先生
 - 森 鷗外先生
 - 湯原 元一先生
 - 岸邊福雄先生
 - 三輪田元道先生
 - 宮田脩先生
 - 下田次郎先生
 - 馬上孝太郎先生
 - 高島平三郎先生
 - 鳩山春子先生
 - 安井哲子先生
 - 嘉悦孝子先生
 - 山脇房子先生
- 御申込次第全拾貳卷『内容見本』進呈
- 『母と子文庫』發行所
東京小石川戸崎町九十
- 創文社
電小石川四八四七番
振替東京三五八二番

好き楽器と信用の置き寫眞機

ソリオキアヴ



定價表
參貳壹
號號號
その他七十五回まで

二十九圓五十八錢
二十圓三十三錢

ソリドンマ



定價表
CBA
號號號
その他五十四回まで

二十九圓五十八錢
二十圓三十三錢

□賞讃の的となれる

素人向きのカメラ



定價表

十二圓
十八圓
廿二圓
廿六圓
三十二圓
五十三圓
七十五圓

御問合せは必ず往復葉書か返信料添の事。御注文は住所を分りよくわしく書く事。代金は總て前金の事、剰餘の節は返金す。拂込みは成るべく振替口座に拂込むこと。

キントツノ社代理部

電話九段貳千七百五十貳番
振替口座東京參〇五七貳番

誠實と迅速は本代理部の信條

(三の付後)金

愛讀者諸君の爲代理部の開設

値段其他の御希望を明細記入の上御注文になれば必ず諸君の満足の出來る品を撰擇します

西條十八氏編輯



月刊詩と童謡の新研究雑誌

委員 青木茂氏 加藤まさを氏 内藤鋳策氏 野口雨情氏 三木露風氏 本居長世氏 山田耕作氏 若山牧水氏

定價 寄稿の種類は小曲童謡短歌自由
一畫用紙は氣持よき物を選べ
数量に制限を設けず賞金は入選一篇に就五圓以上參拾圓
締切毎月二十日
十月號締切八月三十日(締切後到着の分は次號まはし)
送金は成べく振替に依られたし

自由畫 兒童 童謡 小曲 西條八十氏選
自由畫 兒童 童謡 野口雨情氏選
自由畫 兒童 童謡 内藤鋳策氏選

錢拾貳圓壹金册三 錢拾四金册一價定
錢拾五圓參金册九 錢拾參圓貳金册六
▷要不料送◁ 錢拾五圓四金册二十

發行所 やりにか 東京白 石殿 川三 區

五號要目	表紙	初山	滋
研究	野口	雨情	勉
加田	愛咲	二	
山田	健太郎		
狩野	鐘太郎		
社員會員	童謠、自由		
詩、批評、	地方童謠、		
童謠一覽、	童謠雜感、		
其他			
別刷			
曲譜	本居	長世	
童謠	西條	八十	
カット	初山	滋	

誌 雜 刊 月 究 研 謠 童

ぼん と

刊 創 月 四

(錢五十三 部一價定)

行 發 社 ぼん と 會 謠 童 本 日

地 番 三 町 舟 區 谷 四 市 京 東

○ 五 一 四 四 京 東 座 口 替 振

すまじ集募に般一を詩由自び及想感、文論るす關に謠童・謠童作創
 込申御へ添を料信返は定規員會 りあ點特々種他其引割代誌は員會
 すまじ致附送第次

本誌顧問	西川 勉氏
中山 晋平氏	野口 雨情氏
山 村 暮鳥氏	藤 森 秀夫氏
西 條 八十氏	北 原 白秋氏
三 木 露風氏	弘 田 龍太郎氏
本 居 長世氏	

(四の付後)金



録 附 三九 三九 船の金

の後 山六爺さん

沖野岩三郎

五

世界一の大芝居だといふので、どんな事が始まつてゐるのか知らずと思つて、爺さんも婆アさんも、西の方の杜の中を走つて行つて見ますと、杉林の向ふの廣い芝生の上には鹿が何百足とも知れず角を振り立て、遊んでゐるのです。
 「先ア、大變な鹿ですネ。此の鹿がお芝居をするんですか。」
 爺さんは前に立つてゐた土佐の守の肩のところに頸を載せながら聞きました。
 「爺さん、今に面白い事が始まりますよ。」と土佐の守と右衛門が言つた時、向ふの櫻林の中が、俄かに騒がしくなつて、ザ、ザ、ザ

と枝を振り動かすものがあるので、其方の方を見ると、今まで芝生に遊んで居た鹿が、皆な思ひ出したやうに柵林の中へ走り込みました。そして間もなく蹄の音を立てながら林の中から躍り出して来たのを見ると、これは先、何といふ不思議な事でせう。鹿の脊には可愛らしいお猿が一疋づつ乗つて居るぢやありませんか。大きなお猿は枝を握のやうに握りつけて威張つてゐます。小さい猿は危なっかし、鹿の角を握つてゐます。お洒落な奴は、鹿の頭の方へ脊中を向けて倒まに乘つてゐます。

「これは面白い、私も最う七十七年生きたが、マダこんなお芝居は見た事がない。」と云つて、山六爺さんは相好を崩して笑ひました。

「これは面白い、私も最う六十六年生きたが、マダこんなお芝居は見た事がない。」と、婆アさんは、爺さんの口真似を致しました。

三百疋の鹿は一疋宛のお猿を脊に乗せて、柵林に横列になつて芝生の西の端まで静かに歩いて来ましたが、皆なが上手に廻れ右をして並んだ時、社の東の方から何百とも知れない身が、カア／＼カア／＼と鳴きながら飛んで来ました。續いて、鹿子が長い尾を引ながら飛んで来ました。其次に、黒い／＼山鳥が何百も飛んで来ました。鹿が驚かされて、鹿を驚かす鹿へて飛んで来ました。鹿が鹿子となく鹿のやうに飛んで来て、鹿を驚かす鹿へて飛んで一杯になりました。

皆なが「あれ、鹿子だ、山鳥だ、山鳥だ」と唯しく言つてゐると柵林の中から兎と猫とが綺麗に並んで走り出して来ました。鹿列の先頭をクロが赤い舌を出しながら走つて居ました。

此の不思議な行列が芝生の上を、ぐるりと一廻り廻つて、東の端に止つた時、南の社から、物凄く音を立てながら、ガ、ガ、ガと駈け出して来たのは、二百ばかりの大きな猪でした。皆な真白い牙を鋭のやうに突き出してフワーと唸りながら走つて来たので、山六爺さんは、

「危ない！ 皆な樹の枝に這ひ上れ！」と言ひました。で、其所に集つて居た千六百人が大騒ぎをしながら柵の樹に這ひ上りました。

人間の樹のぼりを始めて見た三百疋のお猿は、さも不思議さうに鹿の脊で、ちつと柵の枝を見てゐました。

大變な勢で駈け出して来た二百疋の猪は、右翼と左翼との猪が、びたり！と足を停めたので、皆ば其所に停止して、温順しく鼻の尖で土を吹いてゐました。





「あ、おれを見る！ 大變な事だ！」
と婆アさんが大きな聲で言つた時、一番高い枝の上に居た右大將が、
「狼です。どうしても百五十疋は居ます！」と言ひました。
皆なの人達は流石に顔色を蒼白くして、ぶろ／＼顛へながら、しつかと枝にしがみついてゐました。
狼は一側隊になつて芝生の上に出て來ましたが、一番前頭に元の總大將軍様が、尻尾を垂れてノソ／＼と歩いてゐ、最後を其の奥方が靜かに歩いてゐました。そして北の端へ横列に並んだ時、元の大將軍が、ウーウー……と長く吠えますと、東の端も兎も西の端も其の聲に驚つてゐたお狼も、前後の狼も、出なべた／＼と芝生

生の上に群衆を擧つて行進し、睨いてゐました。狼は、
枝に留つてゐました。
其時クロは何を思つたか、山六爺さんの膝の上つてゐる樅の樹の下へ來て、
ン、／＼と五聲吠えました。爺さんは耳を傾けて聽いてゐましたが、
靜かに枝から降りて行つて、
「私に、どんな用事があるのかい？」と尋ねますと、クロは爺さんの衣物の裾を銜へて振り引張るのです。

「よし／＼、何所へ來いと言ふんだい？」と優しく言ひながら、
クロについて行くとクロは芝生の真中に山六爺さんを伴れて行きました。
それを見たと元の總大將軍の狼は、婆アさんの上つてゐる枝の下へ行つて、
ウーウ、／＼と三聲吠りました。で、婆アさんは、
「私に、どんな用事があるのかい？」と言ひながら枝を降りて行きました。
すると狼は婆アさんの肩物の裾を銜へて引つ張ります。

「よし／＼、何所へ來いと言ふんだい？」と爺さんの口眞顔をしましたので、
枝の上には居た千五百九十八人が、一度にドン／＼と笑ひました。
其時狼は婆アさんを爺さんの側へ伴れて行つて頭立てせましたと思ふと、
恐ろしい大きな聲で、ウーウ……と吠りました。すると山六爺さんに長らくお世話になつた、
クロと二疋の狼と、二

正の鹿と、二正の猪と、元の總大將軍御夫婦とが、爺さん婆さんさんの周囲をぐるりと取捲きました。猫も死も鹿も猪も狼も皆な下顎を水平に土の上に載せて、前脚を思ひ切り前方に伸ばしました。其時一番高い枝の上にあたる右大將と、一番低い枝の上にあたる左大將とが、芝生の上に降りて来て、
 「皆さん、大丈夫です降りていらつしやい。我々が一生懸命にコジキ座で、お芝居の稽古をしてあるうちに、クロや狼や鹿や猪は、各々にお友達を誘つて来たのらしい。そして今日は爺さん婆アさんに謝恩會でもする心算らしい。皆な降りて来て、一緒に祝ひませう」と申しました。けれども、こんなに深山の猪や狼が恐ろしい顔な並べてあるので、皆なは容易に降りようとしませんでした。で、動物學の大家である、銃前の守ち右衛門が先づ杖から飛び下りて、「通り、すなりつと狼や猪の並んである前を歩いて見せたので、皆なは初めて安心したやうに、争うてヒラキ、ヒラキ、ドスン、ドスンと芝生の上を飛び下りました。」



「さア、皆さん一緒に祝ひませう！」
 と自慢の聲を振絞つて、
 「とろり」と出た聲なれど……………
 風にとられた、川風に……………
 と歌ひますと、皆なは一緒に手を拍きながら、
 「ハア、ハア、ヨササノサア……」と囃しました。さうして歌つてあるうちに、皆なが面白くなつてしまつたもんだから、とうとう夢中になつて踊り初めました。最初の頃は神妙に黙つて観てゐた歌達も、いつの間にか浮かれ出して、人間の中へ割つて入り、嬉しそうに駆け廻りました。鳥や雉子や山鳥や鳩も其の上を飛び廻り初めました。八百五十の獣と何千か数へ切れない鳥と千六百人の人間とが一緒になつて大騒ぎを初めましたので、本當に天地も割れんばかりの賑ひでした。とうとう皆なは日の暮れるのも忘れてしまつて、歌つたり踊つたりしてゐるうちに、猪も鹿も猫も狼も、めい／＼



は啾伽おるなに爲い白面

鹿島鳴秋氏著

お伽十五夜物語

郵定四六判全壹冊
稅價金拾貳錢

同氏著

オハナシ

郵定四六判全五冊
稅價各金八拾五錢

日比省吾氏著

東西お伽訓話

郵定四六判洋裝全貳冊
稅價各金九拾五錢

竹貫佳水著

日曜お伽噺

郵定四六判洋裝全壹冊
稅價金八拾六錢

川崎巨泉氏畫

おもちゃ十二支

木版全拾五種
紙入定價金拾五錢
紙仕立定價金八錢

松美佐雄氏著

少女立志お伽噺

郵定四六判全壹冊
稅價金壹圓拾錢

巖谷小波氏著

オトギウタエ

郵定四六判全壹冊
稅價各金八拾五錢

同氏著

日の丸お伽文庫

郵定四六判全五冊
稅價各金四拾五錢

同氏著

子供四十八景

紙入長方形全壹冊
紙入定價金拾貳錢

同氏著

日本一の畫噺

郵定四六判洋裝全壹冊
稅價各金四拾五錢

水田光氏著

修身お伽噺

郵定四六判洋裝全壹冊
紙入定價金拾貳錢

鍋井克之氏著

家庭子供博覽會

郵定四六判全壹冊
稅價各金九拾八錢

に自分の持場々々に歸つて行つて、残るのは山六爺さんの一族と、千六百人だけで了。

『あア、面白かつた、人間と獸との懇親會をしたのは、恐らく世界の中で今度が最初だらう。』と爺さんが申しますと、地理學の大家である尾張の守を右衛門が申しました。

『今から四千三百八十九年前に、ユケナの國で、ノアといふ人がありとあらゆる動物を一つの船の中に招待した事があります。』

『さうですか、それでは我々のば、世界で第二回目の親睦會ですネ。』と言つて昔なば嬉しうな顔付で家へ歸りました。

山六爺さんの前に立つて歩いてゐた元の種大將軍夫婦の姿が、いつの間にか見えなくなつたので、どうしたのか知らず、と思ひながら家へ歸つて見ますと、婆アさんが納屋の前まで来た時、其所に居た狼麁の奥様が、變な聲で、ウーウ……と唸りました。

『あ、もう歸つてゐるのか……』と言つて近寄つて見た婆アさんは、『爺さん、爺さん、大變です……』と嬉しいやら悲しいやら解らない聲で叫びました。



四〇



丸善株式會社
東京 東 日本橋通
東京 東 日本橋通
東京 東 日本橋通
東京 東 日本橋通



大正八年十月十五日
 (第三回展覧會)
 大正十年八月六日印刷
 大正十年九月一日發行(毎月三日發行)

東京 キンノツノ社 發行

三越の九月

定休日
 十月廿六日

増築が落成した、三越呉服店は大變廣くなりました、非常に便利になりました、新秋の御用意は三越

◆赤瑠會 洋畫展覧會

◆東北名産品陳列會
九月一日より六日迄開催例の通り傑作品揃

◆新柄陳列會
九月四日より廿日迄東北六縣の名産諸品

◆九月廿日より廿九日迄今秋流行の品の

東京
三越呉服店